

自由であり、インフォーマント→ブギス語→インドネシア語→英語の二重通訳では調査も短期間では難しい。調査対象者の選定結果をまとめると表4-2-1になる。

### 3. 調査地の概要とインフォーマントのプロフィール

調査手法の適用とその成果及び考察を述べる前に、本項において今回の調査をおこなった地域及び3組のインフォーマントの簡単なプロフィールをこの項において説明する。次の項ではそれぞれのインフォーマントの情報は分解され、調査の細目ごとに並置されて説明されるため、これら3組のインフォーマント及び、彼/彼女らの居住する2つの地域(村)の基本的情報をここであらかじめ解説しておこうとするものである。

#### (1) ラノメト村の概要

##### a. 村の位置と人口構成

ラノメト(Ranomeeto)村は南東スラウェシ州の州都クングリ(Kendari)とその郊外にある国内線空港を結ぶ幹線道路沿いに発達した都市近郊の村である(図4-3-1)。そのため、同村は村長が県長によって任命される都市区域内の村として指定されており、クングリ市の上水道施設が整備されているなど都市的なインフラ整備もおこなわれている。また、都市に近いことから農外就業の可能性の高さなど現金収入の獲得の機会も多く、また逆に現金に依存する部分も大きくなってきているようである。

ラノメト村は総面積15.7km<sup>2</sup>であるが全体的に平坦であり、山岳部は含まれない<sup>7)</sup><sup>8)</sup>。326世帯、1,808人からなる<sup>9)</sup><sup>10)</sup>。以前は隣り村のランギア(Langgea)村も同村に属していたが、世帯数が増え、分割されている。この地域はトラキ人の先住地であるが、1953年に、ジャワ人のラハ(Raha)等からの最初の入植(30から50世帯)を機に、ジャワ人の世帯も増え、現在はラノメト村の総世帯数において、トラキ人の世帯が48.6%、ジャワの世帯が37.0%を占め、残りをブギスとトラジャ(どちらも移住民)が分けるといった民族構成になっている<sup>11)</sup>。村人はほとんどがイスラム教徒であるがわずかにキリスト教徒とヒンドゥ教徒がいる<sup>12)</sup>。

先住民族であるトラキ人たちの生計はサゴヤシ採集と焼き畑での陸稲栽培であった。しかし森林の減少から1960年代に焼き畑は禁止された。現在トラキ人も多く水田耕作を行っている。また、サゴも近年減少してきており、村人の需要に応じきれなくなっている。1961年まで荒地や山の水田への開墾が行なわれていたが、ペストの流行により一時中断されていた。そして1991年にJICAの南東スラウェシ州農業農村総合開発プロジェクトが開始され、プロジェクトサイトの一つとして選定されてから、再び未耕地の開墾が始まった<sup>13)</sup>。

##### b. 村内の施設

村内には村役場、学校(小学校が4つに中学校一つ)、週に三回立つ市、及びイスラム寺

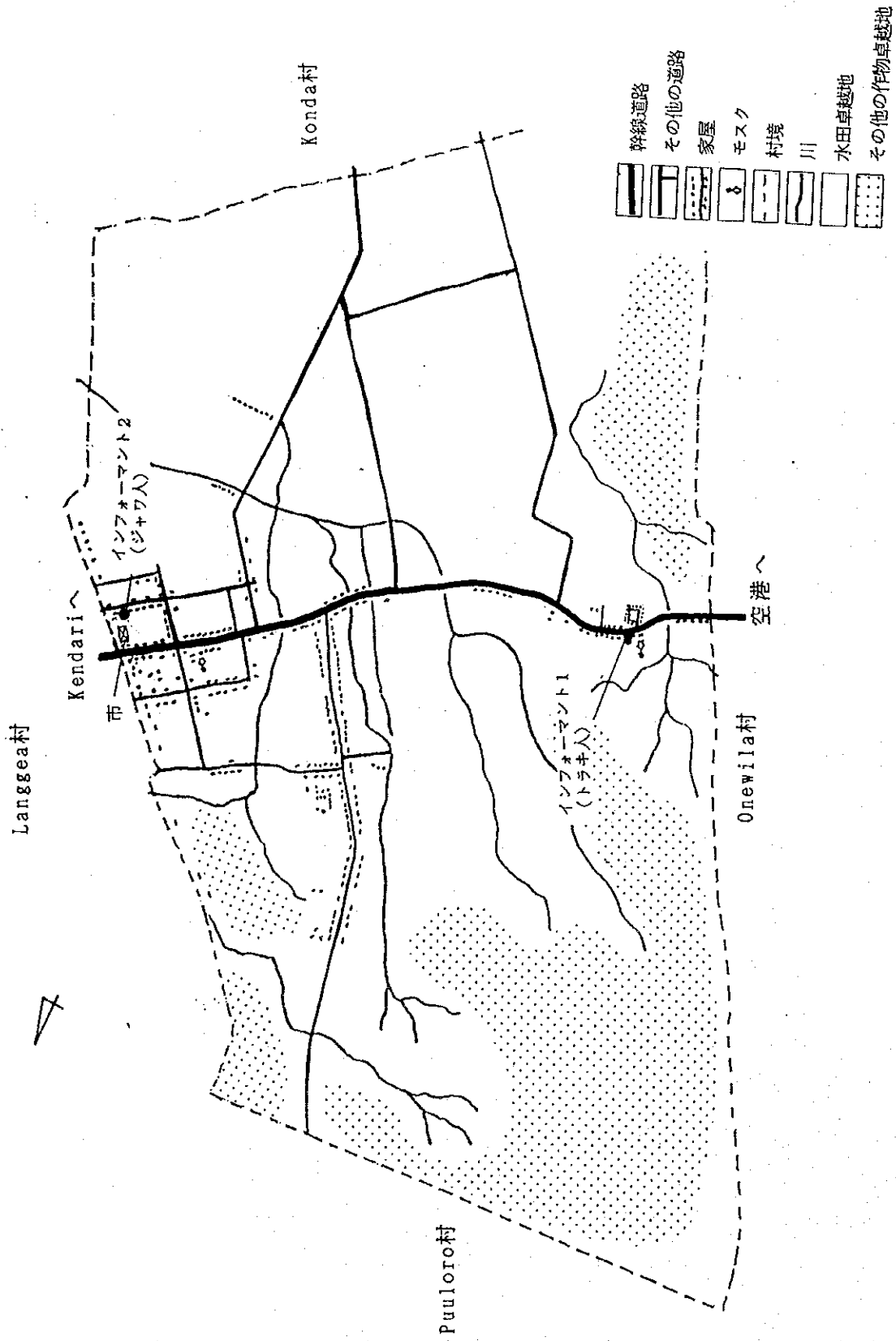


図 4-3-1 ラノメト村概略図  
 (ラノメト村役場での掲示地図及びGovernment of Indonesiaより作成)

院がある<sup>14)</sup>。また、政府の保健センター(Puskesmas)もあるが、村民は今だに伝統的治療師(dukun<sup>15)</sup>)に依存する部分が大いようである。また、JICAのプロジェクトセンターの脇には集会所も建設され、PKKによるポシアンドゥなどの母子保健活動、ワクチン接種などの活動の際に利用されている<sup>16)</sup>。

#### c. 地域社会活動・組織

同村にはLKMD、PKK、水利組合及び農民グループが活動しているが<sup>17)</sup>、中でもJICAの南東スラウェシ州農村開発プロジェクトの活動地域とされたこともあり、農民グループの活動が強く後ろ押しされているようである。農業普及員もプロジェクトの特別の配慮で男女1名ずつが配置され、男性から成る農民組織の他に、農村婦人グループや青年組織もあり、普及活動も活発という印象を受けた。既存の農民グループは村に10グループ程あり、水路の単位と比較的重なっている。グループでは、収入の35%を共同基金として積み立てている。

また、村にはゴトン・ロヨンという相互扶助機能もあり、家屋の建設・補修工事や結婚式準備などの場合の自発的な村人同士の助け合いや、道路、水田、井戸建設などの公共的な地域の開発のための活動がなされている<sup>18)</sup>。このような公共事業的な活動の場合、男性は労働提供、女性は炊出しといった形での参加が多い<sup>19)</sup>。

#### d. 村の行事

トラキの人々の間では、昔は新しく森林を開墾したり、収穫の際に、ゴトンロヨンのもとに人々が集まり、祈りをささげ、踊ったりするなどの行事が行なわれていた。現在は法律により、森林伐採が禁止となり、このような行事は無くなり、現在は結婚式などに昔からの踊りが披露されるだけになった。

ジャワ人も耕地開墾の際に人々が集まり、祈りや舞踊などの儀式をおこなっていたが、開墾することも少なくなった現在では、田植えを行なう前に儀式を行なうことで、昔の名残を残している。この儀式には男たちが会場の準備をし、女たちが炊き出しを担当し、儀式の場には男性のみが参加する<sup>20)</sup>。

### (2) ラノメト村インフォーマントのプロフィール

#### a. トラキ人(先住民族)インフォーマント

ハマジャ、サヤティ(夫-Hamadja、妻-Sayati)夫妻

ハマジャさんもサヤティさんもラノメト村の出身である(表4-3-1、表4-3-2参照)。農業の傍らハマジャさんは大工仕事を副業としている。しかし最も大きな現金収入源はカシューナッツである。男4人女8人の計12人の子供をもうけたが、娘ばかり5人が死亡してしまっている。そのうち1人は出産時に、3人は乳幼児のうちに死亡したが、どれもドゥクンに看せたのみであり、ドゥクンへの依存の大きさがうかがわれる。現在生存している7人のうち3人が既婚であり、そのうち上の二人は現在ハマジャさんらと同じ敷地内の父

表 4-3-3-1 ラノメト村トラキ人インフオーマンントの家族構成

(インフオーマンントへの聞き取りより作成)

氏名	性別	年齢	教育水準	既/未婚	居住場所	仕事	備考
夫 Hamadja	男	65**	6年	既婚	同居	農業、大工仕事	以前区長、副村長を務める。JICA70プロジェクトリーダー。
妻 Sayati	女	48	4年	既婚	同居	農業	同村出身。以前はPKKの活動に参加。
第1子 Bartini	女	35	12年	既婚	同じ屋敷地内	農業、高校教師(夫)	同村のトラキ男性と結婚。子供が7人。家は父に建設してもらった。
第2子 Sanusi	男	30	12年	既婚	同じ屋敷地内	トラック運転手(ワガガ)	連う村のトラキ女性(父の親戚)と結婚。家は父に建設してもらった。
第3子 Daswal	男	29	16年	未婚	クダリ市街	新聞社(ワガガ)	
第4子 Subarti	女	27	12年	既婚	同村内(父からもらった土地)	農業、家族計画スタッフ(夫)	遠縁と思われるトラキ男性と結婚。
★第5子 Muraida	女	-	12年	-	-	-	18才でCanagalで死亡(伝統的治療師にみせた後、ワガガ市街の病院に連れていったが治らず)。
★第6子 Suryani	女	-	-	-	-	-	3才で熱病で死亡(伝統的治療師にみだが、病院に連れていく間もなく死亡)。
第7子 Yusnani	女	22	12年	未婚	同居	家事手伝い	PKKのボランティアをしたい。
★第8子 Pina	女	-	-	-	-	-	1才で死亡(突然倒れ、伝統的治療師にみせたが一晩で死亡)。
第9子 Sapur	男	19	9年	未婚	同居	トラック運転助手(兄の手伝い)	
★第10子 Haryati	女	-	-	-	-	-	4才で熱病で死亡(伝統的治療師にみ)
第11子 Muchtari	男	15	6年	未婚	同居	無職(ときどき農業手伝い)	自分の意思で上の学校に行かず。
★第12子 -	女	-	-	-	-	出産の時に死亡(夫の姉；伝統的治療師が介助)。	

□ 同居家族

\* ★は死亡。

\*\* 妻、長女、長男の年齢は推定。

表 4-3-2 ハマジャ、サヤティ (ラノメト村、トラキ人) 夫妻の所有土地面積及び飼養家畜頭 (羽) 数  
(インフォーマンメントへの聞き取りより作成)

区分	住居からの距離	面積/頭 (羽) 数	備考
Pekarangan (家庭菜園)	隣接	2 ha	<p>多種の果樹を栽植。自給が主。 カシュー園。換金用。カシュー園内の他の植物は自給用。 サゴ林。最近是利用せず精製サゴを市で購入。 カシュー園。水田から転作したばかり。 水稲+裏作(ワシロシ、ダイ等)。自給が主、余剰分を販売 木材を調達。 魚とり。 牛は農耕用。</p>
Ladan1 (畑)	家庭菜園に隣接	4 ha	
Rawa (湿地)	Ladan 1に隣接	1.5 ha	
Ladan2	約500m先	1.5 ha	
Sawah (水田)	約500m先	2 ha	
Hutan (森林)	約5 km先	20 ha	
小川	Ladan 1の奥。	所有せず利用のみ	
家畜		牝牛2頭、ニワトリ2羽	

の建ててくれた家に住んでいる。残る次女も父の分けてくれた土地に住んでおり、土地が潤沢にあるせいか、子供の性別にあまりこだわりなく必要な順に財産が分与されているように見える。子供たちはほとんどが高校まで出ており、またハマジャさんは以前区長や副村長をしたこともあるなど、村の中でも暮らし向きはよい方であろう。

所有する土地は屋敷地、湿地のサゴ林、カシュー園、水田及び森である。森はかなり遠隔になり、サヤティさんはほとんど入らず、ハマジャさんが建材の必要なときにはいるのみという。所有する土地はすべてハマジャさんの父祖から継がれてきたもので、名義はハマジャさんである。以前は焼畑で陸稲栽培をしていたが水稲も1949年からつくってきており、トラキの中での先がけ農民といえよう。そのため普及員との関わりも深く、現在もJICAのプロジェクトのコンタクト農民となっている。

#### b. ジャワ人(移住民)インフォーマント

カディムン、スラミ(夫-Kadium、妻-Sulami)夫妻

カディムン、スラミ夫妻は数年前に隣村のランギア村から畑のあったラノメト村に移ってきた(表4-3-3、表4-3-4参照)。カディムンさんはコラカ村(Kolaka:南東スラウェシ州東岸の都市)で生まれ両親とともに1953年にランギア村にやってきた。ジャワからの、コラカでのワンクッションをおいての自発的な移住組である。一方スラミさんはランギア村生まれであるが、やはりジャワから移住してきた家系である。二人の結婚は、カディムンさんの意向と双方の両親(とくに父親)の合議によって決定され、スラミさんは口を挟む余地はなかった。結婚式はスラミさんの両親の家でおこなわれ、そのまま3カ月間同居し、次にカディムンさんの両親と8カ月間同居した。そののち再びスラミさんの家族とともに暮らしていたが、スラミさんの妹とのいざこざがあって別居を決意したものである。5人の子供たちのうち長男はランギア村に住んでいる。

所有する土地は屋敷地、園地、水田である。森は薪を集めるために利用しているが所有形態は不明である。屋敷地はまだ移って来たばかりなので野菜などを広く栽培しているが、そのあいだに果樹などを植え込んでいる。ランギア村にある園地ではカシューナッツを栽培している。また、カディムンさんは農業の傍らコンクリート製の井戸のパーツやブロックをつくって販売している。

#### (3) パラッカ村概要

##### a. 村の位置と人口構成

パラッカ(Palakka)村は県都であるバル(Barru)市から南東方向に17kmほど山に入った村である(図4-3-2)。1987年に村の南部が分割され、アナバウア(Anabau)村となった。1983年にバル市と村を結ぶ道が舗装され、公共バスが通るようになり交通の便が非常によくなった。しかしバスの運賃は現金収入機会の少ない村人にとっては安いものではなく、いまだに徒歩で通っている人も少なくない。

表 4-3-3 ラノメト村ジャワ人インフォーマントの家族構成

(インフォーマントへの聞き取りより作成)

氏名	性別	年齢	教育水準	既/未婚	居住場所	仕事	備考
夫	男	40	6年	既婚	数年前まで妻の両親や兄弟姉妹とともに隣村(ワギア-Langea-村)で暮らしていたが、妻の妹といざこざが起こり、農地のあった同村に移ってきた。	農業、コンクリート製品(井戸パーツ、ブロック等)づくり	コバ (Kolaka) に生まれ1958年に両親とともにワギア村に移住してきた。
妻	女	36	不明	既婚		農業	ワギア村出身。19才で結婚した。
長男	男	-	不明	不明	隣村(ワギア村)に居住		
次男	男	-	在学中	未婚	同居	職業訓練校学生(コンピュータ専攻)	
三男	男	-	在学中	未婚	同居	経済高校学生	
長女	女	-	9年生	未婚	同居	求職中	
二女	女	-	不明	未婚	同居	不明	

同居家族

\*ワギア村は以前ラノメト村と一つであったが、分割されて別々の村になった。

表 4-3-4 カディムン、スラムィ (ラノメト村、ジャワ人) 夫妻の所有土地面積及び飼養家畜 (羽) 数

(インフォーマントへの聞き取りより作成)

区分	住居からの距離	面積/頭 (羽) 数	備考
Pekarangan (家庭菜園)	住居に隣接	合わせて1.25ha	} 広く野菜や作物を栽培。野菜や作物は主に換金用。果樹香料等は主に自給用。
Kebun 1 (園地)	家庭菜園に隣接		
Kebun 2	隣村(ワギア村)	3 ha	カシュー。換金用。
Sawah (水田)	住居の向かい	2.5 ha	水稻+裏作(ワカセイ、トウモロコシ等)。自給及び販売用。
Hutan (森林)	不明	所有せず利用のみ	薪等を収集。
家畜		アヒル (羽数不明)	

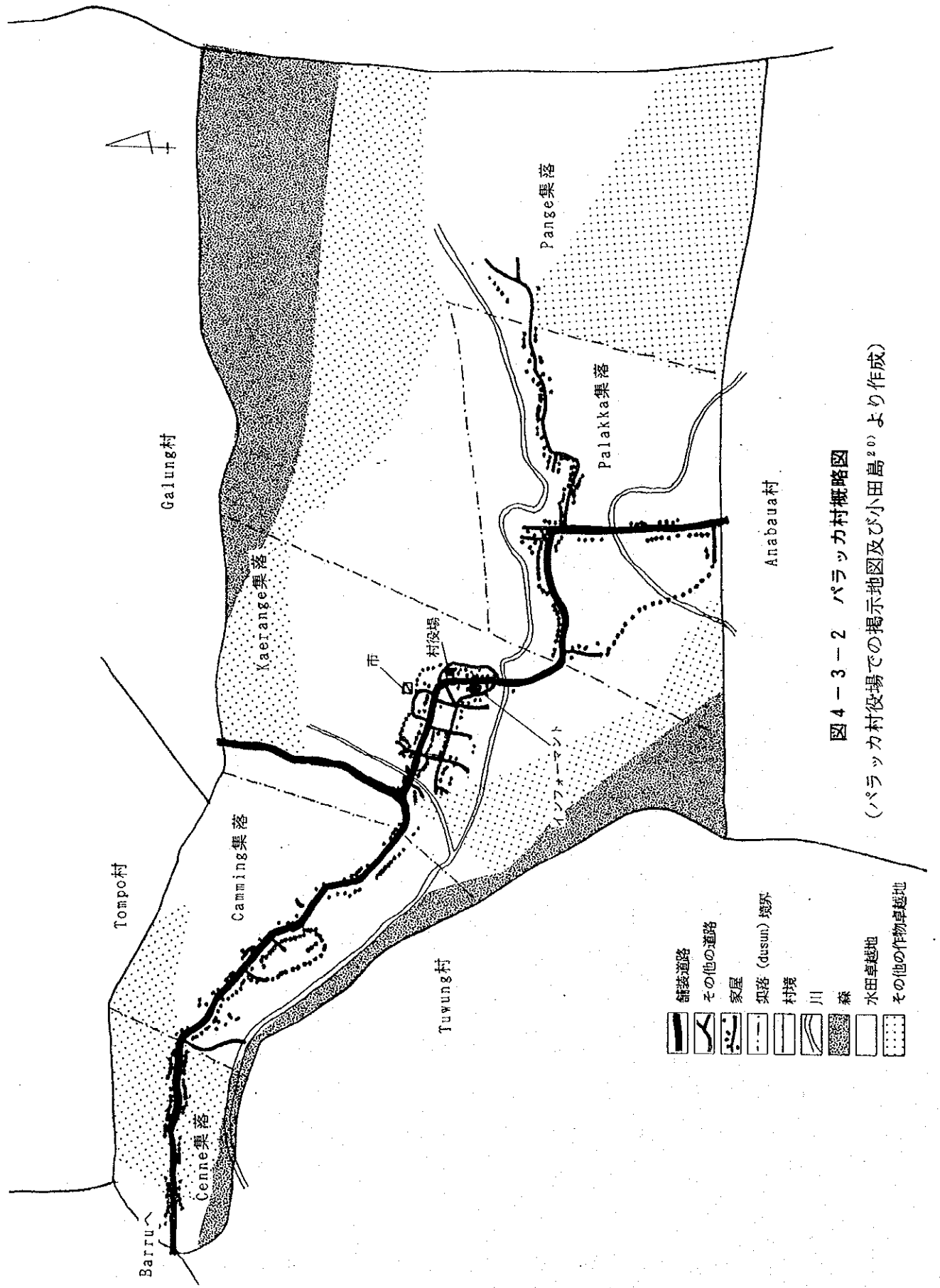


図 4-3-2 パラッカ村概略図  
 (パラッカ村役場での揭示地図及び小田島<sup>20)</sup>より作成)



村の世帯数は 560、人口は 2,369人である。全員がこの地に古くからいるブギス人であり、ブギス語しか理解しない人も多い。また全員イスラム教徒である。女性世帯主は全体の約 2 %で夫に死別した女性たちである。この村からは村外に出稼ぎに行く人は余り多くないが、スラウェシ島に近いマレーシアのサバ州、サラワク州に行き農園等で働いている若者たちは幾らか見られる。出稼ぎに行くのは男性であり、女性は家を守りながら待つのが通常である<sup>22)</sup>。

村の総面積は 3,633haであり、その半分近くが山岳部に分類されている。村のおおまかな土地区分は sawah (水田)、pekarangan (家庭菜園)、kebun (園地)、perkebunan (エステート農園) 及び hutan (森) である<sup>23)</sup>。土地無し農民は全体の 5 %程度ほどと見積もられており、ほとんどの農民が自分の土地を所有している。1980年頃までは焼畑もみられたが、現在森は政府の管轄下におかれている<sup>24)</sup>。村人は燃料としての薪は自由に採取できるが、木材やロタンを利用するときには政府の許可を必要とする。村の主要作物は米、ラッカセイ、トウモロコシである<sup>25)</sup>。

#### b. 村内の施設

村内には村役場、小中学校、集落詰め所、簡易保健所及びその管轄下の母子保健所、イスラム寺院、雑貨店舗及び週 1 回立つ市がある。また、村の共同の井堰<sup>26)</sup> と国際 NGO である CARE-Canada の援助による湧き水からの共同水道が設置されている。高校がないため、中等教育を終えた子供たちはバル市まで行かないといけない<sup>27)</sup>。

#### c. 地域社会活動・組織

公のグループとしては農民グループ及び女性農民グループがある。前者は男性のグループで 5 つあり 90 %の男性が加入している。後者は 1994 年につくられ、現在グループ員は 25 人である。農業普及員が組織したが、PKK と一緒に働いている。

インフォーマルな形としてあるのが女性たちの碎石グループである。州道を舗装するのに用いる砂利をつくる(川から石を集めてきて砕いて砂利にする)作業の共同グループである。

また、村としての共同作業がゴトンロヨンとして行われている。年に一度の男女の村内環境整備(道路の側溝掃除など)、男性の道づくり・改修、井堰づくりなどの作業、モスク建設等の作業が村もしくは集落単位で行われる。大規模な作業については村長や集落長などの村内のリーダーたちが集まって決定する。また、それとは別に家の移築<sup>28)</sup>などでもゴトンロヨンが機能している<sup>29)</sup>。

#### d. 村の行事

村としての行事はないが、結婚、割礼、コーラン読み(収穫後にアラーへの感謝を込めて行う)等の行事では村人達が集まる。このような行事は自発的なゴトンロヨンが組織し、女性たちも積極的に参加する<sup>30)</sup>。

#### (4) パラッカ村インフォーマントのプロフィール

##### a. ブギス人インフォーマント

アブドゥル・ラーマン、ヤンナ（夫-Abdur Rahman、妻-Yanna）夫妻のプロフィール

アブドゥルさんはパラッカ村で生まれ育った（表4-3-5、表4-3-6参照）。以前区長をしたことがあり、村のリーダーの一人である。ヤンナさんは近隣の村のタネトリアジャ(Tane to Riaja)村から双方の父親の合意のもとにこの村に嫁にやってきた。夫の両親とともに以前は村の中のもっと山寄りの地区に土地を借りて住んでいたが、山の侵食が激しく危険なことから、現在の場所に家を移築した。

生まれた子供6人（うち息子3人、娘3人）のうち息子と娘一人ずつが幼い内に亡くなっている。成長した息子二人は知り合いに誘われる形でともにマレーシアに出稼ぎに出かけたが、上の息子はそこで事故に逢い、死亡してしまった。マレーシアについていていた彼の妻と一人息子は現在村に戻り妻の家族とともに暮らしている。アブドゥルさんは息子たちのマレーシア行きに賛成していない。マレーシアからの送金がなくても換金作物の栽培面積を増やせば十分補えるという。

現在一緒に住む家族は二人の他に結婚した娘夫婦家族と未婚の娘である（現在マレーシアにいる息子も帰ってくれば同居となる）。ヤンナさんは嫁に来たが、このように娘が結婚後も両親と同居することも多いようである。

所有する土地はアブドゥルさん名義である。屋敷地、園地及び水田を所有している。2km先の、チークの植林をしている園地からは薪、葉草、野草等が手に入る。森は10kmほど離れており所有していないが、建材などがここから調達されている。また、娘たちは碎石グループに加わっている。河原から石を取ってきて、住居の一階部分で時間を見つけては作業をする。そこから得た金は彼女らの小遣いとなっている。

（畑中初音・吉野馨子）

#### 4. 調査手法の適用と考察

前項で説明した3組のインフォーマントを対象に、インフォーマント世帯の生活の成り立ちを把握するために聞き取り及び踏査による以下のような調査を行った。

- 1) まずはじめに、インフォーマントが認識している身の回りの自然資源（土地、作物、有用植物、家畜、その他利用している自然資源等）を大まかにつかまえた。
- 2) 次に、それらの資源について、詳細なリストアップと利用法、加工法等に関する質問をおこなった。これにより生活に必要な物資（今回は植物資源に限って調査）をどのように自分たちで調達しているかの概要をつかむためである。
- 3) 自給できない物品について、彼/彼女らがどのように確保しているかを把握するために、交

表 4-3-5 パラッカカ村ブギス人インフォーマントの家族構成

(インフォーマントへの聞き取りより作成)

氏名	性別	年齢	既/未婚	居住場所	仕事	備考
夫 Abdur Rahman	男	58	既婚	同居	農業	以前はもっと山寄りの場所に夫の両親と同居していたが、土砂崩れが危険なために家を現在の場所に移した。
妻 Yanna	女	50**	既婚	同居	農業	近隣の村 (タトリグ + Tane to Riajaf) から嫁いできた。
★第1子	男	-	(既婚)	-	(3年前3才の時、マルジの農場に出稼ぎ中に事故で死亡した)	妻子(子供は息子一人)も共にマルジに渡っていたが、夫の死亡後村に戻り現在は自分(妻)の両親と同居している。
★第2子	男	-	-	-	-	2、3才の頃に病気で死亡。
★第3子	女	-	-	-	-	生後6ヶ月頃に病気で死亡。
第4子	女	25	既婚	同居	夫の職業不明	
第5子	男	24	未婚	同居 (現在マルジに 出稼ぎ中)	マルジの農場(ブランヂヨ)の運転手	夫と二人の子供とともに自分の両親の家に同居している。
第6子	女	20	未婚	同居		

□ 同居家族

\* ★は死亡。

\*\* 妻の年齢は推定。

表 4-3-6 アブドゥル・ヤンナ夫妻 (パラッカ村、プギス人) の所有土地面積及び飼養家畜頭 (羽) 数  
(インフォーマントへの聞き取りより作成)

区分	住居からの距離	面積/頭 (羽) 数	備考
Pekarangan	住居に隣接	0.021 ha (2.1a)	果樹、野菜、葉草等を栽植。自給用。 キウイ、アザミ等を販売用に栽培。他の植物は自給用 水稻+農作(アザミ)自給が主。余剰分を販売。 セイ、トコロソ等) チークを植林。薪、野草等を採集。 木材を調達。 生活用(湯水時には飲用にも)、灌漑用、河原の石を砕石 して現金収入に。
Kebun 1	約100m先	0.35 ha	
Sawah 1	約100m先	0.3 ha	
Sawah 2	約600m先	0.3 ha	
Kebun 1	約2 km先	不明	
Hutan	約10 km先	所有せず利用のみ。	
川	約50m先	所有せず利用のみ。	
家畜		ニワトリ、アヒル (羽数不明)	卵、肉を自家消費及び販売。

換、売買の状況を聞き取り調査した。また、近隣の市を訪ねて市がどのように成り立っているかを踏査及び聞き取りで調査した。

- 4) 生産活動、再生産活動の労働分担について併せて調査をおこなった。家族の中でどのように労働が配分されているか、またそれぞれの作業がどのような決定過程、手順を踏んで行われているかを把握するためである。

これらの各項目について、3つのインフォーマントへの調査から得た結果を説明する。とくに各調査をとおして浮かび上がってくる点、またインフォーマントの特徴を明らかにしていくための視点等に留意して記述することとする。

(1) インフォーマントの自然環境の認識、生活の成り立ちの把握：土地／資源利用の聞き取り

インフォーマントの自然環境に対する認識や生活の成り立ちの大きな構造をつかまえるために、彼らが周囲の自然資源をどのように利用しているかを聞き取った。この時には、ただ屋敷の中で数値や説明を聞くだけでなく、所有形態、利用法についてできるだけ正確な詳しい情報を得られるように、それぞれの場所を見せてもらいつつ聞き取りを行うようにした（今回は時間の不足のために森や屋敷から遠い耕地へは行けなかった）。

a. 土地、資源利用の概要把握

3人のインフォーマントの自然資源利用をイメージ的にまとめたものが図4-4-1である。

一番上段のハマジャ、サヤティ夫妻（ラノメト村、トラキ人）は、広大で多様な木本植物に覆われた屋敷地、森林を拓いた焼き畑跡地であり二次林的な性格を帯びたカシュー園、小川、その奥に湿地に広がるサゴ林を一つながりに所有（小川は利用）している。そして屋敷から500mほど離れたところに水田とその横の小区画の野菜畑及び水田から転作してつくったカシュー園がある。水田からの転作は猪などの害に悩んでいたところJICAの専門家に勧められてである。また、単なる実の食べられる野生の植物であったカシューを15年ほど前に換金作物として栽培し始めたのは彼が村でいちばん最初であったが、これも農業普及員に他の地域でカシュー栽培が儲かっていることを聞き、勧められてのことであった。

トラキ人は森林の焼畑を生業としてきた人々なので、森との結びつきは親密であるはずなのだが、人口の増加、都市近郊化が進むにつれ森林はどんどん後退し、彼らの利用できる森林は現在5kmも先になってきている。森林について最初は所有していないという話であったが、しかし話していくうちに森林を所有していることがわかってきた。しかし遠隔であるためにサヤティさんはほとんど行くことがない。はじめ彼女は屋敷地裏のカシュー園を森と説明したが、これには以前ここが森であったこと、現在も燃料、その他材料、野菜となる植物などを入手することができる、彼女にとっての森の代替物として認識されているからである可能性が高い。

サゴはトラキ人にとって重要な主食である。サヤティさんも米とサゴは必ず食卓に並べる

→ 住居から遠くなる。

自分の住居

ハマジタ サテライト夫妻の  
土地、資源利用  
(ランメート村、トラキ人)

幹線  
道路  
Pekayangan (屋敷地)  
50種以上の植物  
(金魚、調味料、薪、  
薪、肥料、薪炭、  
用等様々な用途)

小川 Rawa (湿地)  
魚とり サゴ草

Sawah (水田)  
農繁期には出作り  
小屋 (Rubi) に泊ま  
る。水田の脇に野  
菜畑。

Hutan (森林)  
3km先。木材調査。

カディムン、スラミ夫妻の  
土地、資源利用  
(ランメート村、ジャワ人)

幹線  
道路

(池) / 道 水田  
屋敷地  
家の畑で囲まれており、畑が  
広がっている。畑の中には落  
葉の小屋。間に植えられる菓  
樹は樹陰が深い。畦の裏側用  
の池を造成している。

Kebun (園地) 隣村に所在。  
カディムン園地  
他の作物、有用植物はない。

森林 (所在地不明)  
薪を収集。

アブドゥル、ヤンナ夫妻の  
土地、資源利用  
(ハラワカガ村、ブギス人)

州道  
屋敷地  
小さな数多  
種の植物を  
栽培。

水田  
周囲にココヤを  
栽培。

水田

園地 2km先  
チーグを栽培  
薪、薪炭、薪草  
(ワザン) はここ  
を薪とも表現)。

森林  
10km先。木材を調達

図 4-4-1 インフォーマントの土地、資源利用観

(聞き取り及び踏査から作成)

という。しかしこのような広いサゴ林を所有していながら、彼らは自分では精製せずに市で買ってくる。人手が足りないせいであるとのことであったが、実際はカシュー栽培により現金が入るようになり、その現金で精製されたサゴを購入することと、自分でサゴを精製することの大変さを比べて前者をとったものであろう。このように伝統的な食物を摂り続けてはいながらも、その関わり方が変化してきていることが察せられる。

中段のカディムン、スラム夫妻（ラノメト村、ジャワ人）は、現在の住居に移ってきて間もないことから、広大な屋敷地は畑の様相を呈している。しかしその間々にさまざまな有用な木本植物などを植えており、少しずつ屋敷地が成熟していくものと思われる。また、調査地周辺では見かけない魚の養殖池の造成に見られるようにジャワ的な屋敷地を作り上げている一方<sup>31)</sup>、この地の主要作物であるサゴを屋敷地内に植え込むなど地域固有の植物資源の取り込みも図るといった両輪で生活を成り立たせている様子に興味深い。

耕地としてはほかに屋敷地のすぐ近くにある水田と、以前の居住地であったランゲア村にカシュー園がある。森林は薪集めなどで利用しているとのことであったが、森林がどこにあるのか等詳しいことは不明である。また薪は購入して済ませることもあり、きつい労働を現金で置き換える変化がみられる。

下段のアブドゥル、ヤンナ夫妻（パラッカ村、ブギス人）の資源利用形態はまた異なる。山間地で平地が少ないことから土地所有の規模はラノメト村の2人のインフォーマントと比較すると小さい。特に屋敷地は家でほぼ占有されており、植物被覆も前二者と比較すると少ない。

屋敷地での生産の量的な不足は近くにある園地で補われている。ここはさまざまな植物の垣根で囲まれており、整地され栽培されているササゲ、ラッカセイやキャッサバなどの野菜のあいだに果樹やナス、ワサビノキなどの野菜やタケなどの材料となる植物が1、2本の単位で植えられ、多様な有用植物が確保されている。また、住居から2kmほど離れたところにチークを栽植した園地があり、ここへは週に2回ほど薪を取りに夫婦ではいり、その折りにヤンナさんは野生の野菜、薬草なども取ってくる。また、タケなどの日々の生活に必要な資源は森から住居に近い園地に移植するなどして確保している。水田は2枚あり一枚は園地の横に、もう一枚は600mほど離れた場所にある。

屋敷の近くを流れる川はさまざまな用途に利用されているが、このところ現金収入源として河原の石からの州道建設用の砂利づくりが女性たちの間で盛んになっている。ヤンナさんの娘さんの場合、他の仕事の合間にこの作業をすることで1カ月で1万ルピアほど手にはいるということであり、現金獲得の機会としては少なからぬ額である。しかし、母親のヤンナさんはこの作業をせず、娘さんも目的は自分の小遣いを得るためであり、少なくともこのインフォーマント世帯はそれほど現金に対して窮乏感を感じていないようである。

アブドゥル、ヤンナ夫妻の森との結びつきは、ラノメト村のハマジャ、サヤティ夫妻と類似しているように見受けられる。森が伐採されたり国有林とされたために住居から遠隔になるにつれて、生活圏の中に代替物を探さねばならない。屋敷に近く、日々の生活のために薪を提供してくれ、その他いくらかの暮らしに役立つ植物を提供してくれる場を妻たちは必要としており、そこで代替機能を果たしているカシュー園やチークの植林地を彼女らは”森”として指し示す。夫たちが木材を入手できる森を正当な森であると述べているのと比較すると、夫婦間の意識の違いが明らかになる。

一方家畜飼養に関しては、大家畜はハマジャ、サヤティ夫妻が牛を2頭飼養しているだけで、他の2組のインフォーマントは飼養していない。牛は農耕用が第一目的であるので、牛をもたない他の2組のインフォーマントはトラクターを借り入れるなどして耕起をおこなっている。また、小家畜としてはニワトリ、アヒル、ハト等が数羽の単位で飼養されているが、それも、死んでしまったなどの理由で飼養されていない時期もある。自家消費や販売による現金収入に役立っているが、食料源や収入源として中心的な役割を果たすほどではない。

上記の事柄から、ハマジャ、サヤティ夫妻の森とサゴという伝統的自然資源との結びつきとその変化、カディムン、スラミ夫妻の養殖池の造成にみられるジャワ的な屋敷地へのこだわり、アブドゥル、ヤンナ夫妻の高床式住居と小さな屋敷地とその小さな屋敷地を補う園地の植物の多様性に加えて森の資源の利用、といったそれぞれの自然資源の利用の特徴があらわれている。また、カシューナッツ栽培、碎石作業などの新しい現金収入源のあらわれと生活の変化も見ることができる。

このように、土地や資源のインフォーマントの認識とその利用、そしてその変化を把握することにより、彼らの基本的生活のなりたちの大枠が捉えられ、また市場経済などの浸透による変化を知ることができる。

今回は時間不足でできなかったが、視点を地域全体にひろげると、地域社会での資源への価値観やインフォーマントの地域の中での位置なども見えてくる。例えば、他の人は利用するがインフォーマントが利用していない資源やインフォーマントが独特に利用している資源の有無について把握することは、地域社会におけるインフォーマントの経済的、社会的状況を理解する助けとなる。また以前は利用したが近年利用しなくなった（またはその逆）資源などについても合わせて聞き取っていくことにより、地域社会における各資源への価値観とその変化を把握することに役立つだろう。

#### b. 生活とより強く結びつく場所：屋敷地利用詳細

土地、植物資源の中でも、とくにその利用が日常生活に密着している屋敷地の資源を把握することは彼/彼女らの日常生活を理解することに大きく役立つと考えられる。そこで屋敷地については簡単な植栽マップをインフォーマントとともに屋敷地内を歩きながら作成した。また住居ものぞかせてもらい、簡単な住居の間取り図を作成した。これはインフォーマント



が調理、水浴、排泄、休養、団欒、洗濯、貯蔵、家畜飼養等の日常の活動についてどのような認識と位置付けをもっているかを理解するのに重要な情報を提供する。

ハマジャ、サヤティさん夫妻（ラノメト村、トラキ人）の広大な屋敷地は果樹を中心とした木本植物で覆われている（図4-4-2）。広い面積の屋敷地の中にはいと薄暗いほどである。ココヤシ、ドリアン、ランブータン、サントルなどの高木に覆われた樹冠の下にはコーヒーやカカオといった換金作物が不規則に植え込まれている。それらの成木の下には多数の実生苗が育っており、この中から優良なものを屋敷地内の他の空いた場所に移植することによって更新する。また、コショウやパッションフルーツなどのツル植物が果樹などに這わされており、重層的な土地利用が観察される。ナス等数種の野菜も栽培されるが、果樹中心の屋敷地利用といえよう。また、住居の前面は多数の観葉植物が鉢などに植えられており、心地よい居住空間がつけられている。屋敷地内の植物には肥料は与えず、屋敷地内を歩き回る牛の糞が自然の堆肥となっている。

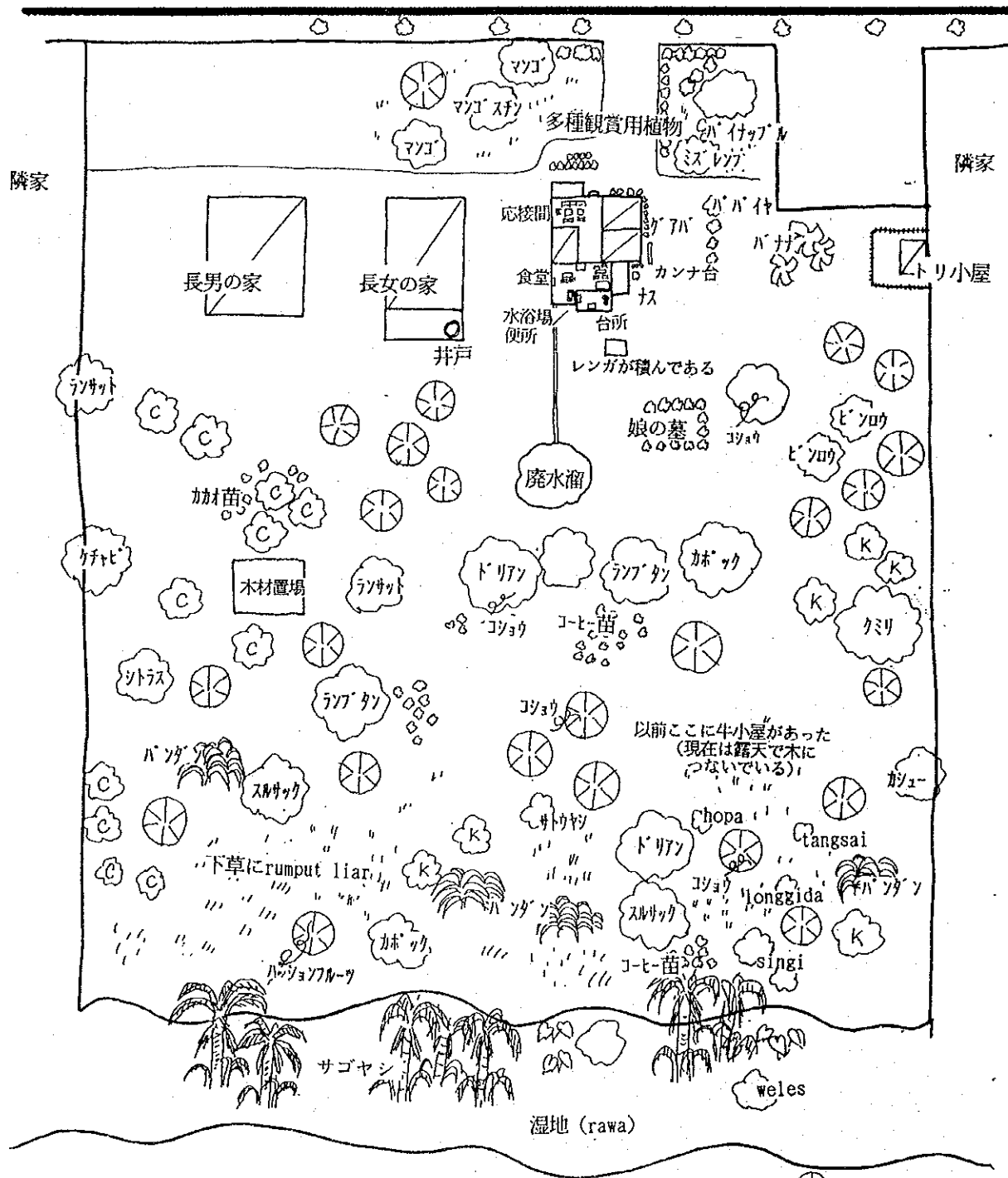
屋敷地の中には幹線道路に面して彼らの住居の横に長男と長女の住居が並んでいる。ハマジャ、サヤティ夫妻の住居はコンクリート床、ブロック壁の漆喰塗りできており、玄関を入ると立派な接客用空間もつけられてあるが、住居の後ろ半分はまだ建設半ばといった状態である（図4-4-3）。建材やレンガが屋敷地の中に置かれており、徐々に住居がつけられていく様子が見える。水浴場と台所が奥につけられており水浴場兼便所もコンクリート製である。水道は飲用、調理用、水浴用としては市の上水道を利用し、洗濯などには長女の住居の裏にある掘り抜き井戸の水を利用している。生活排水は桶を伝って住居外に出され、住居裏の廃水池に貯められている。台所は住居の一番裏手にありまだ木造である。カマドは、金属の板を曲げて、穴を二つ打ち抜いたもので、その上の棚には燃料となる薪が積まれている。

カディムン、スラム夫妻（ラノメト村、ジャワ人）の屋敷地は猪などの野生動物から作物を守るために頑丈な柵で囲われている（図4-4-4）。また、敷地内には猪よけのドラなども置かれている。前述のハマジャ、サヤティ夫妻も猪の害のために水田を転作しており、この地域では生活、生産において野生動物の害を視念に置かずにはいられない。

屋敷地内の植物は、前述のように移って間もないため木本植物も成長しておらず、とりあえず住居の周囲に成長が早く土止めや日陰づくりの効果のあるバナナを多く栽植している。その一方でパパイヤ、マンゴ、ランブータン、ドリアンなどの果樹が植え込まれており、これらがやがて成長し、木々に覆われた屋敷地が形成されていくのであろう。また、レモンゲラス、トウガラシなど日常用いる香辛料は住居の近くに確保されている。

垣根植物として多く植えられているマメ科植物のガマル(*Glyricidia sepium*)は、垣根や土止めとしてのほかに緑肥として、燃料としてなど多目的に利用できる環境保全的な植物である。また、野菜が多様な輪作、混作体系により栽培されており、集約的で循環的な土地利用

幹線道路



カシュー園 (ladan)




-  ココヤシ
-  コーヒー
-  カカオ

図 4-4-2 ハマジャ、サヤティ夫妻の屋敷地利用 (ラノメート村、トラキ人)  
(踏査及び聞き取りより作成)

用がなされている。一方で野菜の栽培作目の決定には、そのときどきの市場での需要が重要な要素となっており、市場経済的な農業経営の意識があらわれている。

住居は居間、寝室と台所からなる(図4-4-5)。水浴場と便所は屋敷の外である。いまだ建設中であり、台所の壁などは植物の茎で葺いた簡素なものである。これから徐々に床のコンクリート固めなどをして完成させていく予定にしている。

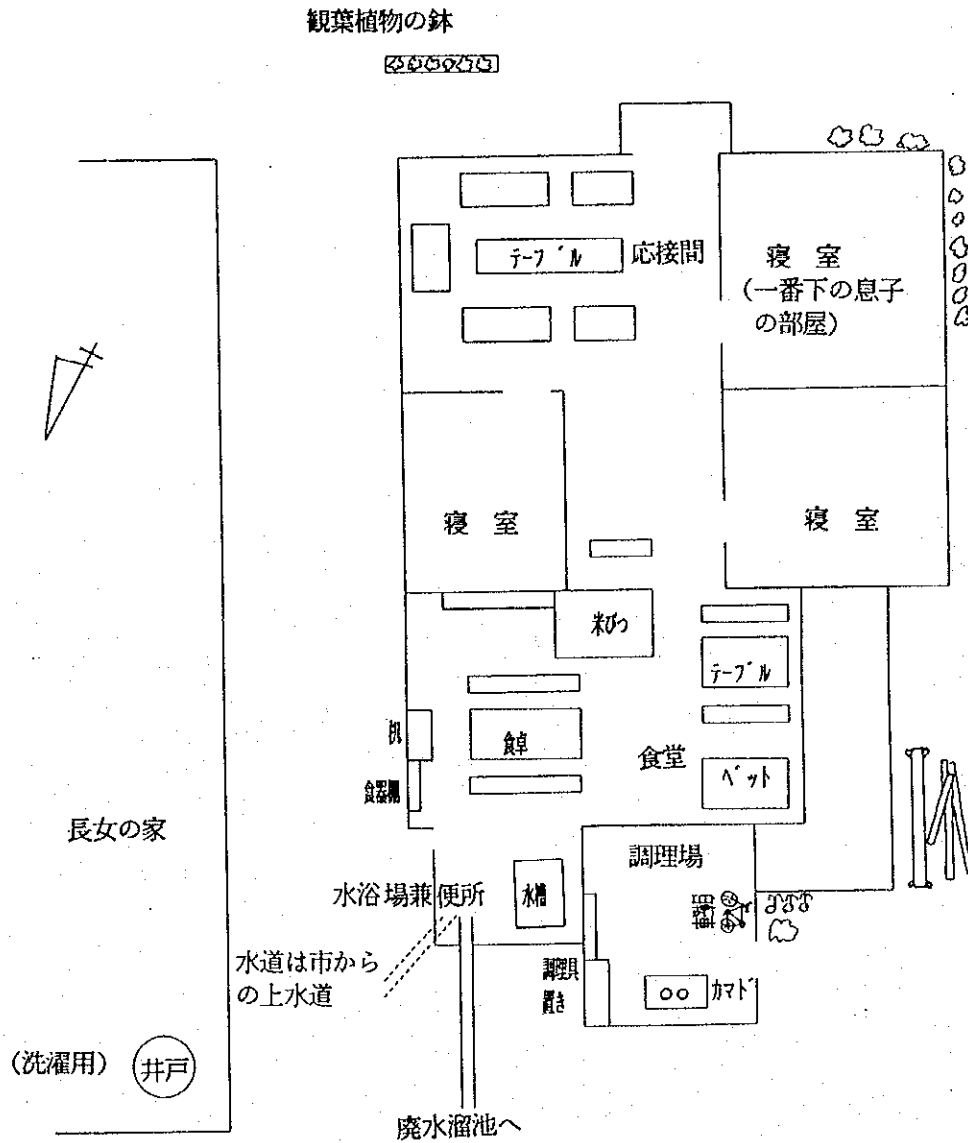


図4-4-3 ハマジャ・サヤティ夫妻の住居見取図

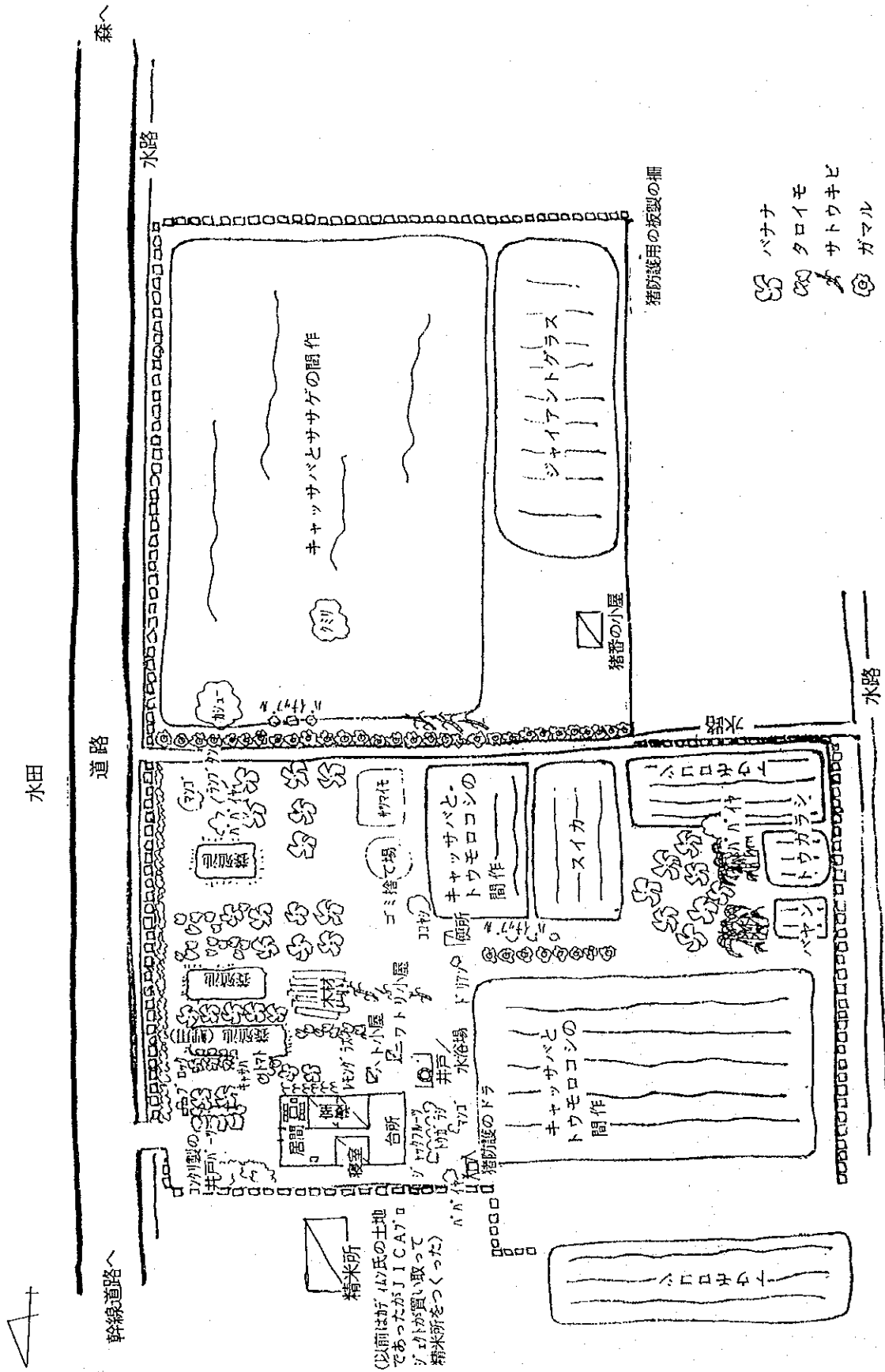
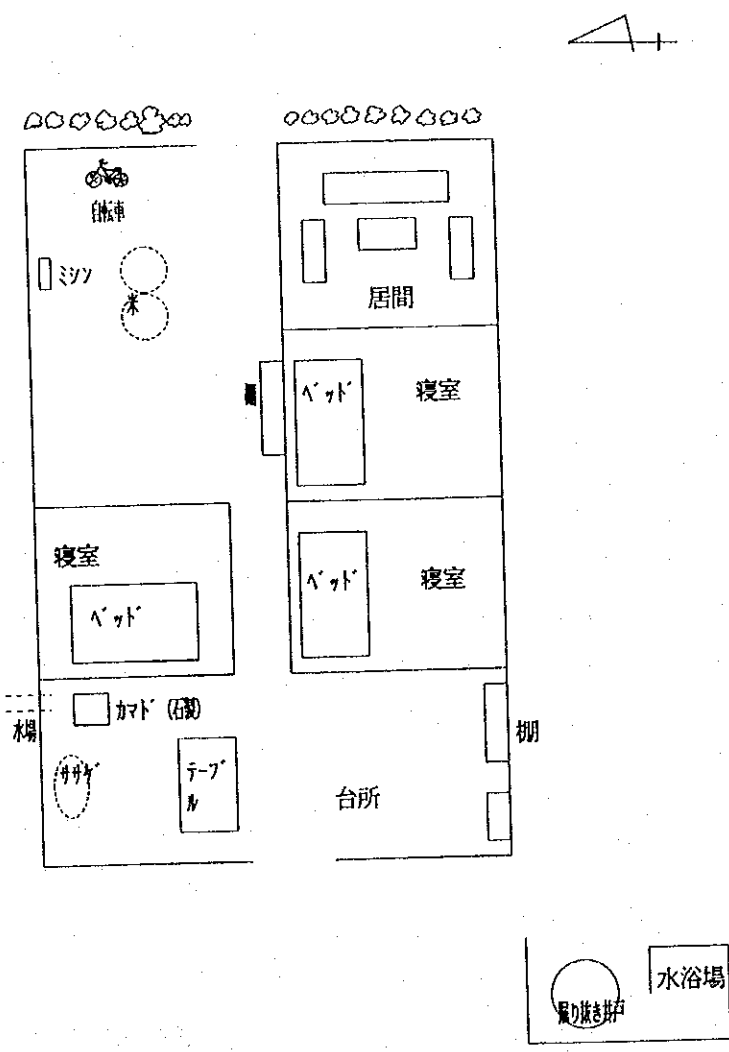


図 4-4-4 ガディムン、スラム夫妻の屋敷地利用 (ラノメート村、ジャワ人)

(踏査及び聞き取りより作成)



便所

図4-4-5 ガディムン、スラム夫妻の住居見取図

アブドゥル、ヤンナ夫妻（パラッカ村、ブギス人）の屋敷地は前二者に比較すると非常に小さい（図4-4-6）。住居の周囲にいくらか空間がある程度である。しかしその中には多種の果樹類、野菜類、香辛料類、薬草類が少量ずつ植えられている。日常の調理に用いる香辛料や野菜、家族の病気の時などに役立つ薬草などが備えられており、必要最低限のものは身の回りに置いているようすがうかがえる。

住居は高床式である。十数本の柱に支えられた形で住居は建っており、地面とその柱の間に置かれている石は、柱の長さの違いや地面の微妙な傾斜の調節をとっているのであろう。このような構造は引っ越しの際に家ごと移動するというやり方とも大きく関係している。高

床にしても柱を地面に埋め込むほうがより安定するであろうにそうしないのは移動の時の利便のためであろうか。移築には時間も手間もかかるため、実際に行われることは少ないようである。しかし、このような移動を与件としたような居住のしかたは生活にも何か影響を与えていることが考えられる。

高床式住居の一階部分は水浴場兼便所、家畜小屋、作業場、物置が設けられている（図4-4-6）。2階は住居部分である。一番奥には台所があり、そこでの廃水は粗く並べられた板の床の間から下に落とす形をとっている。飲料水は2年前にCARE-Canadaの援助によってつくられた村の共同水道からホースで水を引いている。しかしこの水は常に利用できるわけではなく、渇水したときには川の水を飲料水としても利用せざるを得ないことになる。コンロは薪を用いる形のコンクリート製のものであり、薪は1階に森から集めてきたものを積んである。一度燃やした薪の燃えがらの炭をもう一度利用するために集めている様子から、薪が貴重なものであることがわかる。3階は屋根裏で穀物が貯蔵されている。稲はモミのまま、トウモロコシも穂軸に実がついたまま貯蔵される。採種した野菜などの種子もここで保管されている。

それぞれのインフォーマントたちの家には大工道具が見られた。大工仕事と左官仕事は男なら持っているなければならない技術と考えられている。彼らにとって家を建築することは再生産活動の一環であり、また人生における重要な事業でもある。そこで近隣の者も協力し、現金が貯まるごとに少しずつ家を建設、改築していくのである。

これらインフォーマントの屋敷地利用を見てみると、日常生活に必要な植物が住居の周りに確保されている様子がわかる。また、住居は男たちの相互扶助によって家は建てられているが、その建材は植物の繊維や森からの木材といった現金を必要としない材料から、ブロックやコンクリートへの志向が高くなってきていることが窺われる。そして小金が貯まるごとに、少しずつその望まれる姿へ向かって造り替えられていくのである。家財においても小さいものはプラスチック製品から、大きいものはミシン、ソファセット等まで、購入しなければ入手できないものの比率が高くなっており、より現金を必要とする生活に対する志向が察せられる。

## (2) 生活をより豊かにするための、多種多様な資源の利用の工夫の把握：資源カタログ

前段でインフォーマントが示してくれたそれぞれの場所において、彼らが有用であると認識している資源を指し示してもらい、それをポラロイド写真機で撮影した。今回はインフォーマントが家畜飼養、狩猟、漁労等にあまり従事していないことや調査時間の不足もあり、植物資源に限って調査を行っている。撮影後住居に戻り、各々の植物について利用法などを説明してもらい、植物資源カタログを作成した。それを一つの表にまとめたものが表4-4-1、4-4-2である。聞き取りでは栽植者、利用法及び、いくつかの植物については入手法、分配法（販売、贈与等）を聞いた。ここでは比較的まとまったデータが集まったハマジャ、サヤティ

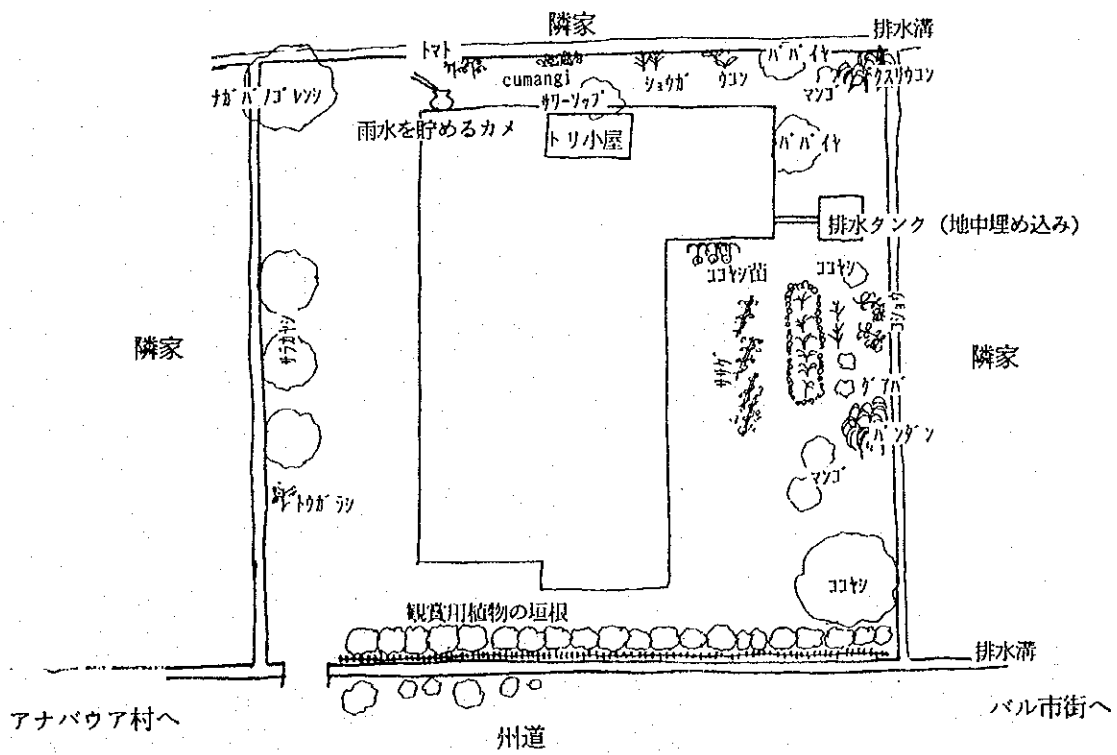
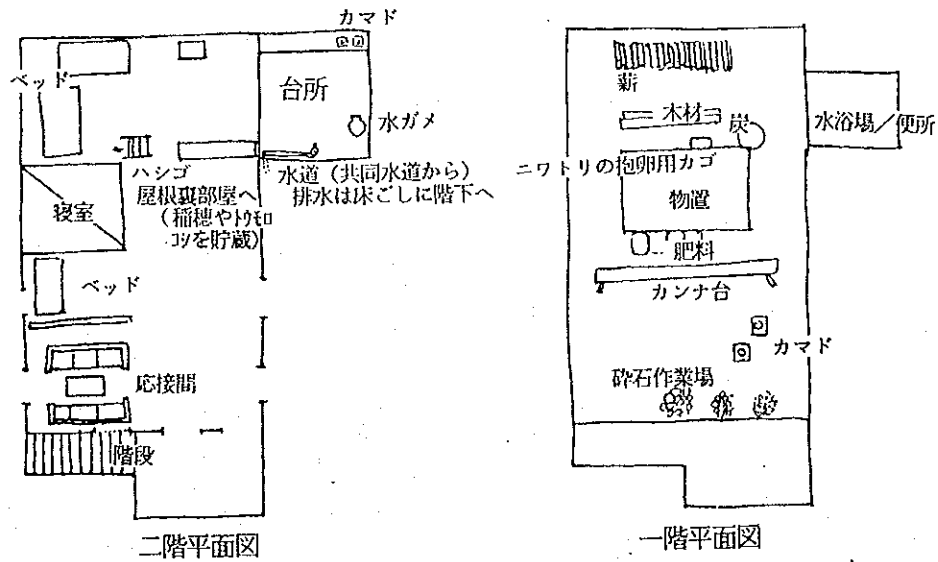


図4-4-6 アブドゥル、ヤンナ夫妻の屋敷地の利用 (パラッカ村、ブギス人)  
(踏査及び聞き取りより作成)

表 4-4-1-1 ハマジャ、サヤティ夫妻の植物資源リスト (ラノメート村、トラキ人)  
(聞き取り及び踏査より作成)

植物名(学名)	(インドネシア)	(漢名等)	木が楽 草が楽 葉が楽 (その他)	利用法	利用法(備考)	植物名(学名)	備考
[SAM]	水田						
pac	pad	竹					
?	paom	林檎					
?	bedel	バナナ					
?	tecanh bijro	バナナ					
[LDM]							
daha sera	jaba mele	バナナ	*	茎: ナンパとして、煮よく、生食、乾かして果物。			以前は里に野生の植物であった。農業発展に伴って消滅したと考えられ、15年前から栽培された(昔では一帯からであった)。
salit	salit	バナナ	*	(利用法への質問に対しては未だ実がつかないかという意であった)			バナナで茎を買ってきた。
huncap	paqa	バナナ	*	実: 果実として、煮る、生食、焼く、煮て利用。茎: 牛/羊の餌。			
lecer	paqa(paq)	バナナ	*	葉: 煮汁を飲む。		kamporia plinpa	子供の服が着なくなった時に、バナナから買った。
loio	paqa	バナナ	*	根: 煎薬として、香辛料として			
huncap	paqa	バナナ	*	竹: 建材(籠等)、果物運搬の材料として			竹は以前は多くの場所にはなかった。ジャバ人が来てきた時に手に入るようになった(インフォーマントは別のジャバにもあった)。
lejai	?	?	自生	木材: とても良質な木材		?	本薬材に由来する植物。
kanala	?	?	自生	果: 野菜として		?	本薬材に由来する植物。
lyrt sh	?	?	自生	木材: 燃料として焚き、果実: 炒めて食べる (ナンパの殻は殻かす)。		?	本薬材に由来する植物。
paara	?	?	自生	葉: 煮食(甘い)		?	本薬材に由来する植物。
orot	?	?	自生	果実: 生食(甘い)、茎: ナンパとした若、汁を飲む。		lhookedunna sp.	本薬材に由来する植物。
reubi	?	?	自生	葉: 煮食(酸っぱい)、年に1回採れる。茎: 煮つけて(自然乾燥)、木材: 籠等の材料。		?	本薬材に由来する植物。
[SAM]							
aropo	paqa	バナナ		サツマシロ: 水と混ぜ、そこに煮出してかき混ぜて食べる (かきたら又煮る)。竹: 建材。葉: 籠を煮(材料)、根: 籠運搬の材料。			
kanala	lejai	バナナ	*	果: 煮る。茎: 野菜として。		Colocasia sp.	
reiser	?	?	自生	茎の繊維: 籠を煮(材料)、葉: 煮る (実が土に落ちる)。		?	
[LDM]							
lejai	paqa	バナナ	*	豆: 煎る。			
paqa	?	?	*	葉: 煮る。茎: 煮る。		?	
paqa	paqa	バナナ	*	果: そのまま煮(こめ煮も多い)、根: 籠を煮(材料)。		kamporia plinpa	昔からあった自家製の木の子を煮た。
reiser	paqa	バナナ	*	果実: 生食。			
lyrt	paqa	バナナ	*	果実: 煎薬として(魚肉)、ナンパと一緒。木材: おもり(煮た)は煮ない。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			
paqa	paqa	バナナ	*	果実: 煮く、木酢、ココナツ(煮)作り(葉が作る)。			





表 4-4-2 アプドゥル、ヤンナ夫妻の植物資源リスト (パラッカ村、ブギス人)  
(聞き取り及び踏査より作成)

植物名 (学名)	(インドネシア名)	(英名等)	未だ採集 夫が採集 妻が採集 妻が採集し 夫が採集し 妻が採集し 妻が採集し	利用法 (食からの聞き取り)	利用法 (食からの聞き取り)	植物名 (学名)	備考
(SIAI)							
asel	pasli	木	+				
hiber	besant			+			
(I207)							
comperat	lengai laah	木	+	マヌ・ケネ (the hachol) の材料 ***			
be	lengai	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
be lape	lengai puaht	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lase aja	whi lara	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lansiatolo	whi jalar	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
loding	lengai	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lajoro	lajor	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lance	lencal	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lora	lora lencal	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lallili	lallili	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
causa	causa	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
bibi bala	bibi bala	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
laja seng	laja seng	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lola	lola	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lamba lili	lamba lili	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
ru	ru	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
laja jati	laja jati	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
ala	ala	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
ala seng	ala seng	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
ala lara	ala lara	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lila pai	lila pai	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
pele lallili	pele lallili	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lura	lura	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lura	lura	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lucola	lucola	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
(PERANG)							
be lape	be lape	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lance	lance	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lansyense	lansyense	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)
lurica	lurica	木	+	マヌ・ケネ 煮る、キノコと煮る、葉、野菜、ウツのエサ			煮る (食)

新物名(漢名)	(イノドネツ7名)	(英名)	夫が薬用	夫が可し	妻が薬用	妻が可し	新用法(はからの開き取り)	新用法(はからの開き取り)	新物名(学名)	備考
conari	teraji	713			*	*	葉・莖根として(生のままナリと混ぜて煮いた湯につける)	Ocimum sp.		
serre	serai	jean grass			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煎す。ナリとナリと混ぜて煮いた湯につけて煮る。	Chrysopsis arida		
laiz/passe	ide	finger			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。	Curcuma (turmeric)		
masji	hupji	terneric			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
haliter	luipa	secoat			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
halili	pepa	23223			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
pa	kaupa	kaup			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
lepa biji	lepa bala	pepa			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
unilaje	silap/serak	serak			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
jeru/camau	belibing	JA 71 197(2)			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
salak	salak	salak			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
pasang	pasang	pasang			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
lepu	lepu lepu	lepu			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
paglis masji	paglis leung	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
buqa lera ping	buqa lera ping	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
-	?	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
-	paglis masji	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
buqa acia	buqa acia	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
-	acu lausji	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
-	paglis leung	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
-	paglis masji	?			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			
lari	lari	lari			*	*	葉・莖根として生のままナリと混ぜて煮いた湯につける。			

夫妻（ラノメト村、トラキ人）及びアブドゥル、ヤンナ夫妻（パラッカ村、ブギス人）のデータを示して説明する。

a. 男性と女性の認識する植物資源の相違：植物資源認識

ハマジャ、サヤティ夫妻の植物資源については妻のサヤティさんが田植え時期で多忙であったことから夫であるハマジャさんに、屋敷地については同居している四女にも協力してもらい、指し示してもらった。ハマジャさんは当初屋敷地にはココヤシ、コーヒー、カカオとランブータンしかないと説明していたが、実際回ってみるとさまざまな植物が見られた（表4-4-1）。その中でコーヒー、ココヤシ、ピンロウジュ、マンゴスチン、甘味で優良な品種のマンゴなど換金性の高い植物はハマジャさんが植えたものが多く、その他の果樹、スパイス、野菜等はサヤティさんが植えている。また、観賞植物はサヤティさんと四女で植えている。彼女も屋敷地での植物栽植に関心が高く、屋敷地内の植物も非常によく認識している。

一方カシュー園は基本的にハマジャさんの守備下であり、カシューの間にぼつぼつと植えられる植物もほとんどハマジャさんの手によるものである。ハマジャさんは重要な換金作物であるカシューについての責任を負っており、また水田の経営管理もハマジャさんが中心的に決定しているように見られる。その他の植物についても、換金性の高いものはハマジャさんが、生活に必要なこまごまとしたものはサヤティさんが管理している。とくに自家採種のような次の栽培のために必要な種子の確保はサヤティさんが負っている部分が多く、有用植物をバザールで買ってくるのはハマジャさんが多いように見受けられる。また、ハマジャさんは大工であるのでそれぞれの木の材質等については理解が高いが、サヤティさんもある程度はわかっている。それぞれの植物の利用法については結婚して隣に住む長女がハマジャ、サヤティ夫妻とともに教えてくれたが、彼女も植物の利用法について理解が深く、生活に必要なさまざまな植物の栽培管理や多様な利用の知識はこのように母から娘へと脈々とつながっているように見受けられた。

アブドゥル、ヤンナ夫妻では夫と妻と別々に聞き取りをする事ができたために、夫と妻で植物認識の違いがより明らかに現れてきている（表4-4-2）。アブドゥルさんが示した植物は換金性の高い資源に偏っている。栽植するのも換金性の高いものが多いが、自分が植えたものでも換金性の高くないものは指し示さない傾向がある。また牛のエサについては男性が通常飼養の担当であるので認識が深い。一方ヤンナさんは多品目を少数ずつ植える傾向にあり、屋敷地内の植物はすべて、また園地や水田の畦などでの小さな場所を見つけての果樹や野菜の栽培はヤンナさんが担当している。このようにヤンナさんは販売よりも日常生活のために必要な野菜、果樹、調味料、薬草などを植えており、妻のみが示した資源の種類は非常に多い。

このように、植物の認識に関して男性と女性では大きな違いがあること、とくに女性は日

常生活に必要な植物を多種にわたり認識し、栽培していることがわかる。そしてその技術は母から娘へと伝わっていくものなのであろう。

b. 生活を豊かにする工夫：植物利用法の聞き取り

ハマジャ、サヤティ夫妻の場合、61種（ダイズ、トウモロコシ、リュクトウ、ササゲ等の栽培季節をはずれていた植物を除く）示された植物のうち、主食として2種、野菜として9種、果物として23種、調味料として7種、葉として7種、木材として11種、繊維として4種、観賞用として12種、その他嗜好品として、洗髪料として、牛の餌として、燃料として、アイロン代わりとしてなど多くの利用用途が認められた。また一つの植物が多様な用途で利用されており、利用の面から考えると61をはるかに越えた利用がされているわけである。

家族の食事の調達、準備はサヤティさんの分担である。主食は米とサゴであり、副食は野菜と魚が多い。そのために、魚をどう調理するかが重要になってくる。そこで魚料理の香り付けのためにさまざまな植物が利用されることになる。また家族の健康管理も重要な用件であり、近代的な医療機関をまだあまり利用していない彼らにとって、日常かかりやすい病気に対する基本的な薬草の確保が重要である。また、娘たちの病気が続いた時にはハマジャさんが市で薬草を買ってきて住居のほど近い場所に植えるなど、必要な資源の補充にも余念がない。また加工製品としては、繊維植物であるパンダンからサヤティさんが編む帽子やマットは自家用以外に販売もしている。また、パイナップルの葉の繊維も以前は取り出して利用していたが、現在は市で糸を買って済ませている。

アブドゥル、ヤンナ夫妻の植物の利用にも似た原理が働いているようである。52種示された植物のうち、主食、またはそれに準ずるものが4種、野菜として12種、果物として10種、調味料として10種、葉として6種、木材として4種、牛の餌として4種、垣根として8種、観賞用として7種、その他多くの植物が燃料として、など多くの用途で一つの植物が多様に利用されている。ここでも魚料理が重要な副食であるため、魚料理に彩りを添えるための調味料として多くの植物が利用されている。

このように植物の利用法は多様である。一つの植物の利用用途はひとつには納まらない。果実は食用に、葉は調味料に、根は薬用に、木材は建材に、と利用される。また、日々の食卓に彩りを添えるためにさまざまな草や木の葉が調味料として活用されている。各々の資源の利用法の聞き取りをとおして、彼らがどのように工夫して食生活に彩りを添え（調理の工夫）、生活に必要な道具（手工芸品、住居建設）を確保し、家族の健康保持（薬草栽培）に留意しているかを知ることにより、市場経済では現われてこない、生活を豊かにする工夫がわかってくる。また、日常の生活に必要な植物に関する知識は女性が、木材の材質や家畜のエサなどに関する知識は男性がより深く持っているなど、家族の中でそれぞれの知識・知恵を補完・統合させる形で生活は成り立っているので、このように夫婦や、望ましくは老人、子供といった家族成員それぞれから情報を得ることにより、より総合的で深い理解が得られ

ることになる。また、前述のパイナップルの葉の繊維の利用のように、時と共に変化し失われていく技術・利用法を記録する事もその背景を把握するとともに重要である。

c. 近隣世帯や外部情報との接触を通しての資源の入手と分配：植物の入手と分配

新しい植物の入手のしかたに関してハマジャ、サヤティ夫妻（ラノメト村、トラキ人）の例を見ると、有用な植物は近隣の人たちとの間でも頻繁に交換されているように見受けられる。これには民族の隔てもあまり無く、また近隣に限らず積極的に入手されている。ラノメト村ではタケはジャワ人が移住してきたことによって新しくこの地域に導入された資源であるということで、その有用性を認めたハマジャさんは、ジャワ人から入手してきて植えている。このようにして、彼／彼女らは積極的に現金を仲介しない形で自分たちの植物資源を増やしてきている。

政府による環境美化運動や農業普及員などの公的なチャンネルを通して導入された植物も少なくない。たとえばハマジャ、サヤティさんの住居前の道路沿いには植木がきれいに並べられているが、これは政府主導の環境美化運動の指導を受けたものである。また、アブドゥル、ヤンナ夫妻の住居の垣根は3年前まで住居がむき出しだったものを普及員に指導を受け、観葉植物の苗を分けてもらって植えたものである。そのときもらった苗は小数であったので、ヤンナさんなどもらった人が繁殖をして、村の人たちに分け続けた。その結果、垣根など見られなかったパラッカ村のほとんど全戸に植物の垣根がつくられている。このように、外部からの情報も、役に立つと思えば村人たちは積極的に取り入れ、自分たちで主体的に活用していくものであることがわかる。

このように新しい植物資源の入手法を聞くことは、村人間での関係性、外部からの情報の伝達の現状を理解する助けになり、またインフォーマントがどのような資源を欲しているか、また資源を増やすにあたってどのような問題点を抱えているかを知る有用な情報ともなり得る。

一方、収穫物の販売、消費、分配等に関する情報からは、それら収穫物の位置づけや、コミュニティ内における富の分配、富の偏在を修正する装置が浮かび上がってくる。たとえば、おいしい果実が成りながらも、ほとんど販売してしまっただけで自分たちではあまり食べないオレンジの木や、村の収穫祭に自宅で穫れたパパイアを他の村人に分配している例がアブドゥルさん（パラッカ村、ブギス人）から聞き取られた。またラノメト村のサゴ生産における収穫者とサゴの所有者の収穫の分配率を他のサゴ生産地の状況と比較することにより、同村においてサゴがどのように位置付けられているかを類推することもできる。

(3) 自給できないものの確保：市－交換による資源の入手

村での生活を理解するには、自給部分ではまかなえない日々の食、衣、住を賄うために村人がどのように外部との関わりをもっているかが重要であり、市、相対販売等における、交換、販売の現状をつかむ必要がある。その地に存在する市の特徴を見ることによって、村人の暮ら

しもある程度類推できる。調査ではラノメト村内の市及びパラッカ村内の市の両方を見ることができたが、両者を比較するとパラッカ村の市は週1回のみで小規模で品目も少なく、一方ラノメト村の市は週3回開かれ、かなり規模も大きくなり品目も多い。そこで、この項では市場経済の浸透の度合いと生活の変化の観点から見るためにパラッカ村の市を説明したのちにラノメト村の市を説明したい。

今回の調査では、村の中に立つ日常生活への最も結びつきの強い市の特徴をつかむための調査と、インフォーマントへの収穫物の販売に関する聞き取りを行った。市での調査は、市の配置を簡単に図に落とし、それぞれの品目の売り手への聞き取り（性別、居住場所、商品の入手先、販売規模、市への移動手段等）をおこなった。また、買い物にきている人たちへも買った品目、金額、市への移動手段等を聞いている。

#### a. パラッカ村の市

市は毎週一回、金曜日の朝7時頃から10時頃まで立つ（図4-4-7参照）。規模はあまり大きくなく、50人ほどの売り手が出ていた。市の中で目立つのは魚の売人、日用品および衣類の売人である。これらは村人たちが自分では調達できない必需品である。ともに市の4分の1近くの面積を占めており、ほとんどが村外の人であった。反対に村人が主に売りに出てくる野菜類は、ラマダン（断食月）中ということもあったかもしれないがその数はあまり多くない。

村からは売り手も買い手も女性が主であり、一人あたりの販売額は小さい。各品目をざっと眺めてみると、野菜、果樹等の自家生産物販売は主に近隣の女性が少しずつもってきて販売している。しかし販売するものはすべてが自家製と言うわけではなく、村の中で他の人から買ったものや、工業生産物も合わせて売る姿も見られる。しかしその販売規模は小さく、500ルピーのトウガラシを売り、2,000ルピーの魚を買うといった具合で、買う金額の方が大きいことも多い。今日の食料を揃えるために買物をしたいがちょっと現金が足りない、自家消費用の生産物が余ってしまったために売る、などの理由で売っている事の方が多いようである。

魚は日々の食事の重要な主菜である。しかし自分では入手できないので買わざるを得ない。そこで市では魚の販売人が一番多いことになる。魚の販売人は全員男性で、ほとんどが近隣の中小都市のバルからバイクなどでやって来た人たちである。

衣類や食器類は行商を生業としている売り手が多い。そのため、経済観念も高く、卸値が安いからと遠隔の都市から買い付けている人も多く見られる。品数が多いので、車を借りるなどの手段でやってくる。

一方買い手はほとんどが近隣地域の女性であり徒歩でやってくる。馬を飼っている世帯もあるが女性は馬を用いることはない。妻が他の用事で多忙な時には夫が代わりに買物に来ることもある。また、それとは別に近隣の若者（男）が市をぶらぶらしている。楽しみの少な

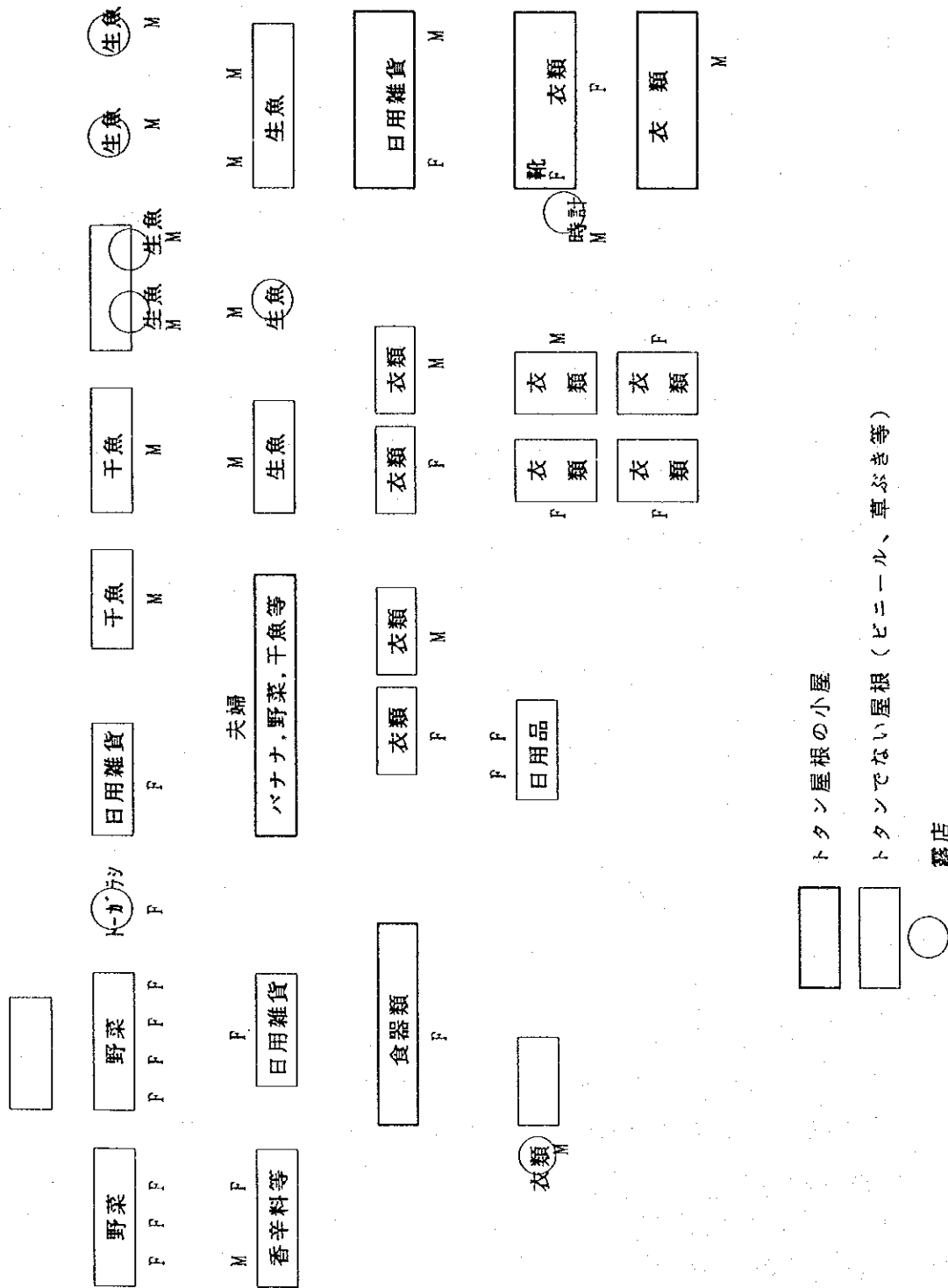


図 4-4-7 パラッカカ村の市 (Pasar) 配置図 (南スラウェシ州 バル県)



い村の生活で、市を冷やかすことがひとつの気晴らしになっているようである。買う内容としては基本的に自分のところでは作れないものを買っているのだが、自分でも作っているキャッサバの粉を、「自分で粉にするのは面倒なので」、と言って買う女性も見られ、自給自足が現金によって変わっていく様子も見受けられる。

パラッカ村の人たちは、この市以外に最も近隣の中小都市のバルに買物に行くこともある。その時はバスを使うことが多いが、バルから村への道を辿ると徒歩で通う人も多く見掛ける。バスは片道 500ルピアで、現金収入の少ない村の人には決して安い金額ではない。

#### b. ラノメト村の市

パラッカ村の市と比較するとラノメト村の市はかなり大規模であり、売り手の数もかなり多い（図4-4-8参照）。販売物の品目としては野菜、果物、魚、卵等の生鮮食料品、コメ、トウモロコシ、精製サゴ等の主食類、嗜好品、お菓子等の加工品、調味料、香辛料等の食品、洗剤などの日用品、金物、衣類や靴、プラスチック製の安楽椅子など、さまざまなものが並ぶ。特に米、サゴといった主食が並んでいるのはパラッカ村と比較して大きな違いであろう。この地域には主食さえも金で買う必要があるということである。また、卵のような一種のぜいたく品を専門に扱う売り手がでていたのも卵を買うことが一般的な状況にあることを示しているわけで、パラッカ村と比較するとかなり市場経済化されてきていることがうかがわれる。

売り手には女性も多く目立ち、特に野菜や加工品はほとんどが女性で占められている。日用品、衣料等は男性の売り手が多いが、これらの品を売る人たちはスラウェシ島の最大都市であるウジュンパンダンや、もっと遠くジャワ島から船に乗ってやってきた人もあり、かなり広い範囲を巻き込んで市が成り立っている。

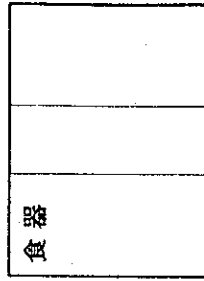
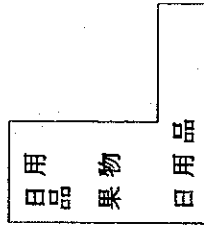
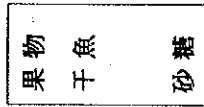
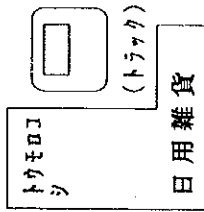
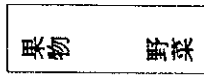
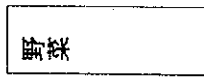
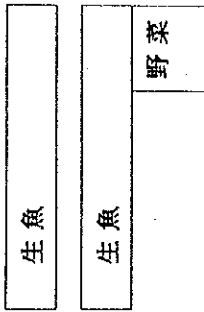
一方周辺村からの女性達の販売や売買の額はパラッカ村同様小規模であることが多く、食品などの日々の必要品を得るためにいくばくかの現金を得ようとしている場合が多い。しかし、これだけの大きな規模になると金儲けのための販売も可能となり、加工品を「もうける」といった意識で販売している女性たちも見られてくる。また、友人とバスを借り切ったりして大きな荷物を持ってきている人たちも多く、この点からもパラッカ村の女性達の野菜の販売とは異なった性格を持ちつつあるといえよう。

一方、パラッカ村でもラノメト村でも米、牛、カシューやラッカセイといった大きな現金収入源は直接に仲買人がやってきて買い取って行ったり、精米所へ持ち込んで売るなど、この市を通らないことがたいていである。村での暮らしにおいて、大きな現金収入源は仲買人などとの相対取引で、日常の小規模な取り引きは市で、という二分化した構図が見られる。

#### (4) 活動の決定と労働配分：農業暦、生活時間帯調査、ライフ・ヒストリー

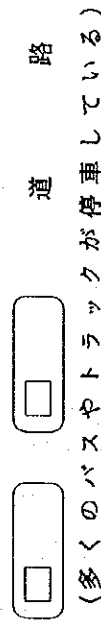
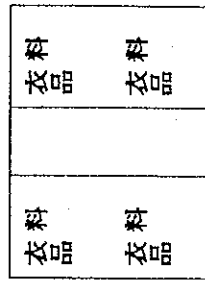
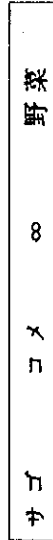
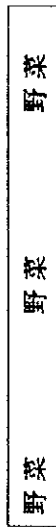
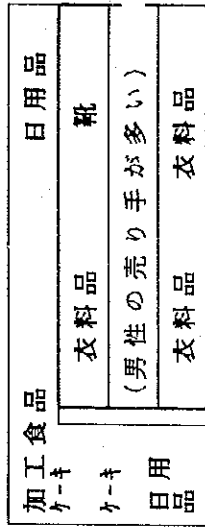
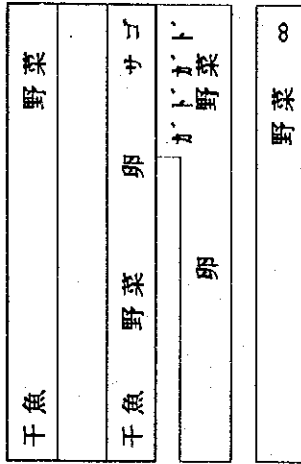
村の人々の生活を維持していくための活動は一日の単位、一年の単位、一生の単位等さまざまな単位で決定され、分担されてすすめられている。一年の季節暦を聞き取ることにより、イ

(魚売場では男性が多い)

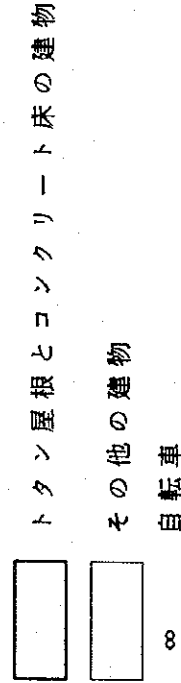


(野菜と果物はほとんどが女性の売り手) (日用品は男性の売り手が多い)

(加工食品の売り手は女性)



(多くのバスやトラックが停車している)



(1995.2.3)

図4-4-8 ラノメト村市場配置図

ンフォーマントの地域の自然環境認識と、一年を通しての必要資源の確保の方策（どの時に  
にが得られるか、それをどのように処理するか—消費、販売、贈与、貯蔵等）が見えてくる。  
そしてそのためのさまざまな活動の状況（活動内容と強度、作業分担、地域内／間の共同作業  
／労働交換の存在の有無とそのしくみ、雇い雇われと支払体系、各作業の方法と道具等）や、  
それらの変化等様々な情報を得ることができる。また、それぞれの活動が誰によってどのよう  
に決定されるか、その決定に役立つ情報を誰がどのように入手しているか、そしてその活動の  
実質的な担当者は誰か、という観点をもつと、家族構成員間の関係性を掘むことにも役立つ。

実際に生産活動、再生産活動を誰がどのようにおこなっているか、それを具体的に把握する  
ことができるのが生活時間帯調査である。また逆に、より大きなスパンで、一生の行事やでき  
ごとを追っていくライフヒストリーなどの手法は、家族内、地域内において誰がどのような役  
割を果たしているか、またそれらの行為の社会・文化的な文脈を理解する助けとなるだろう。

ハマジャさん（ラノメト村、トラキ人）は一年の季節の変化を通常年と10年に一度の乾燥年  
という形で表現した（図4-4-9）。この地域では水が農業、暮らしにおける制約要因であ  
ることがわかる。それぞれの作物栽培でさまざまな作業があるが、基本的に夫婦協力し合っ  
て作業していると認識されている。しかし一つ一つの作業は男性のする作業、女性のする作業と  
区別されており、そこでは女性の中の互助グループ、男性の中の互助グループが浮き上がっ  
てくる。ハマジャさんはその互助グループをアリサンと表現した。この互助は正確にいうと等価  
労働交換であり、私がAさんを手伝ったならばAさんは同じ労働を私に返さなければならない  
というものである。そこでこれはその返礼が近い将来に想定される作業に限られ、返礼がいつ  
になるかわからない住居の建築などでは機能せず（この場合はゴトンロヨンが機能する）、田  
植え（女性）、稲刈り（男女）といった作業で強く現れる。アリサンは上記のように基本的に  
一対一の関係なので、グループは固定的ではないが、緩やかな範囲は存在する。その範囲につ  
いてはハマジャさんのグループもサヤティさんのグループも全員トラキ人であるという。

田植が終わるとブカランガン（家庭菜園）の季節だとハマジャさんは説明してくれた。水や  
りの必要な乾季を避けて果樹などの植え替えをおこなうのである。しかし野菜については乾季  
が盛りであり、水やり等をしながらも栽培しなければならない。この作業の担当はサヤティさ  
んである。また、屋敷地の果樹の世話もサヤティさんが中心で、ハマジャさんはカシュー園の  
世話で忙しい。各作物の栽培計画や労働力の借り入れ、肥料購入など現金の出費がある作業の  
決定や手配はハマジャさんが担当しており、普及員やJICAプロジェクトと接触をするのも  
ハマジャさんが中心のようである。このように経営に関する意思決定はハマジャさんが中心と  
なっている。収穫物の販売はカシューやウシといった大きいものは仲買人がクングリ市から直  
接買いにくるが、その他の収穫物はサヤティさんが市で（米は精米所へ持ち込む）販売してい  
る。

また、家の近くの小川では、魚やエビをつかまえることもあるが、ハマジャさんは魚の多い

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5				
季節	雨季						乾季						雨季								
*通常年	雨季						乾季						雨季								
*乾燥年 (10年に一度)	雨季			乾季			乾季			雨季			雨季		乾季						
水田 (sawah)	田植			施肥 / 除草			収穫			水田農作 (大豆、トウモロコシ、ジャガイロ)			耕耘		田植		除草 / 施肥			収穫	
	↑ 妻 + 女性の7/10 + 村の男女 (資金支払: upa) *雇いの交渉は夫			↑ (夫) (肥料) 尿素, TSP, KCL PT Pertanian (政府の店から購入)			↑ 夫 + 村の男性 (労賃支払)			↑ (妻)			↑ 夫 + 息子 (労賃支払) 村の男性 (労賃支払) (道具) 耕耘: 鍬 (cangkul) 均平: スキ (garu/sisir) + 牛		↑ (夫婦)		↑ 夫婦 + 男女の7/10 + 村の男女 (かん またはハツ: 収量の2/10を分配)			↑ 夫婦 + 男女の7/10 + 村の男女 (かん またはハツ: 収量の2/10を分配)	
	(品種) IR42, Cikapundung *ともに政府の勧める品種												→収穫した米は村内の精米所で売る (妻がバスで運ぶ)。								
Ladan (Upland) (カヤ-ナツク園)	下草刈り						収穫			(植え付け)			下草刈り								
	↑ (多くは夫 + 妻も手伝う) *他の作業がなく時間のある時におこなう。						↑ (家族総出で) 朝6時から一日中 →クンダリ市街から、仲買人が買いに来る (年に1度)。			↑ (植え付けはもう終わっているが、するとしたら雨季に)											
Rawa (swamp) (サゴ林)	季節性なし (開花に季節性はなく、着蕾前の樹齢10年ほどで葉柄が開きだしたものを切出す)。下草刈り (年に一度ほど)																				
							↑ (夫婦) *以前は収穫してクンダリまで夫が売りに行ったりもしたが、現在は入手の不足もあり、自分では収穫せず、市で精製したものを購入している (他の人が自分のサゴを収穫していく時には、所有者として収量の半分をもらえる)。														
Pekarangan (家庭菜園)							野菜の栽培 (ナス、チンゲン菜、Chinese mustard等)			果樹の栽植											
	↑ (は種、水やり等世話、採種 全て妻) *乾季なので水やりが必要。						↑ (多くは妻 + 夫も少し植える) *水やりをしなくていいようにこの時期に植える →収穫物やその加工品は自家消費の他に必要に応じて妻が市に売りにいく。														
Hutan (森)							乾季は入りやすい (しかし木材が必要な時にはどの時期にでも入る)														
							↑ (夫 + 男性の7/10)														
川での魚とり	魚とり						魚とり														
	↑ (夫) *この時期は川に魚が多い。						↑ (妻) *この時期は乾季で川の水が減っているのでザルですくって捕まえる。														
季節	雨季						乾季						雨季								
*通常年	雨季						乾季						雨季								
*乾燥年 (10年に一度)	雨季			乾季			乾季			雨季			雨季		乾季						
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5				

図4-4-9 ハマジャ、サヤティ夫妻の作業季節暦 (ラノメート村、トラキ人)

(聞き取りより作成)

雨季に罾を使ってつかまえる一方、サヤティさんは乾季の川の水位が下がったときにザルですくってつかまえており、同じ”魚をとる”作業であってもその時期や用いる道具、やり方が異なる可能性があることがわかる。

彼らの利用資源とその利用管理についてながめてみると、サゴの季節性のなさが目につく。サゴはある一定の樹齢に達すれば季節に関係なく収穫可能だということであるが、それはつまり、適当な数のサゴがあれば、常時収穫ができ、飢餓を免れることができるというポテンシャルを持っているということであろう。これは生活の安定化において重要な役割を果たしていることが予想される。また自分のサゴがない場合、所有者に収穫の半分を渡すことで外部者が他人のサゴを採ることが認められている。これも現金を介入しないで主食が手にはいる意味で地域での貧困の分配の機能をもっているということができるとは思えないだろうか。

同じラノメト村内でも、カディムン、スラム夫妻（ラノメト村、ジャワ人）の場合はかなり異なり、多様な輪作、混作体系をとっている（図4-4-10）。またトラクターを耕起に利用したり、作業に雇いの労働力を多投するなど、より現金を必要とする経営をしており、栽培品目やその面積はその時の需要や販売価格を視野に入れて計画されているなど企業的である。作業においては夫婦、子供の作業分担がみられるが、近年スラムさんの体調がよくないため、カディムンさんが肩代わりしている部分が多く、カディムンさんを中心にスラムさんが手伝い、不足の労働力を外から借りる、という形態になっているのであろう。

アブドゥル、ヤンナ夫妻間においても作業分担がはっきりと見られる（図4-4-11）。水稻栽培ではアブドゥルさんが経営を担当しているが、田植えの作業は女性の労働交換による作業となっている。田植えの作業の手順を見ると、村人が水田をその地形の特性に合わせてatta salo、caming riattang、ajuaraiと3つに区別して認識していることがわかる。田植えはこの3種の水田を順番におこなわれていくのであるが、このように、水田管理のさまざまな作業がこのように水田の特性に合わせて決定されていることが予想される。また、施肥に関しては夫婦で行うが、この施肥法はアブドゥルさんが農業普及員からの指導に沿って行っているもので、これにより3割強の増収があった。稲刈りは現物支払による労働力の雇入れによっておこなわれるが、この労働力確保において特定の地域との関係がつくられており、その地域はパラッカ村の村人と婚姻においても強く関係を結んでいる。こちらの稲刈り作業を手伝ってもらう代わりに、こちらも稲刈り作業を手伝うという関係が作り上げられており、これにより双方の労働力と報酬が確保される、という安定状況がつくられているのであろう。

稲作のほかラッカセイ栽培、キャッサバ等の換金性の高い作物はアブドゥルさんの主担当であり、ヤンナさんの主担当は屋敷地の植物及び園地の野菜の中の自給部分である。収穫物の販売はヤンナさんが担当している。

このように3組のインフォーマントにおいて、換金性の高い作物は夫が、自給部分に近い作物は妻が主に担当する、という傾向が自然環境や民族が異なりながらも共通してみられている。

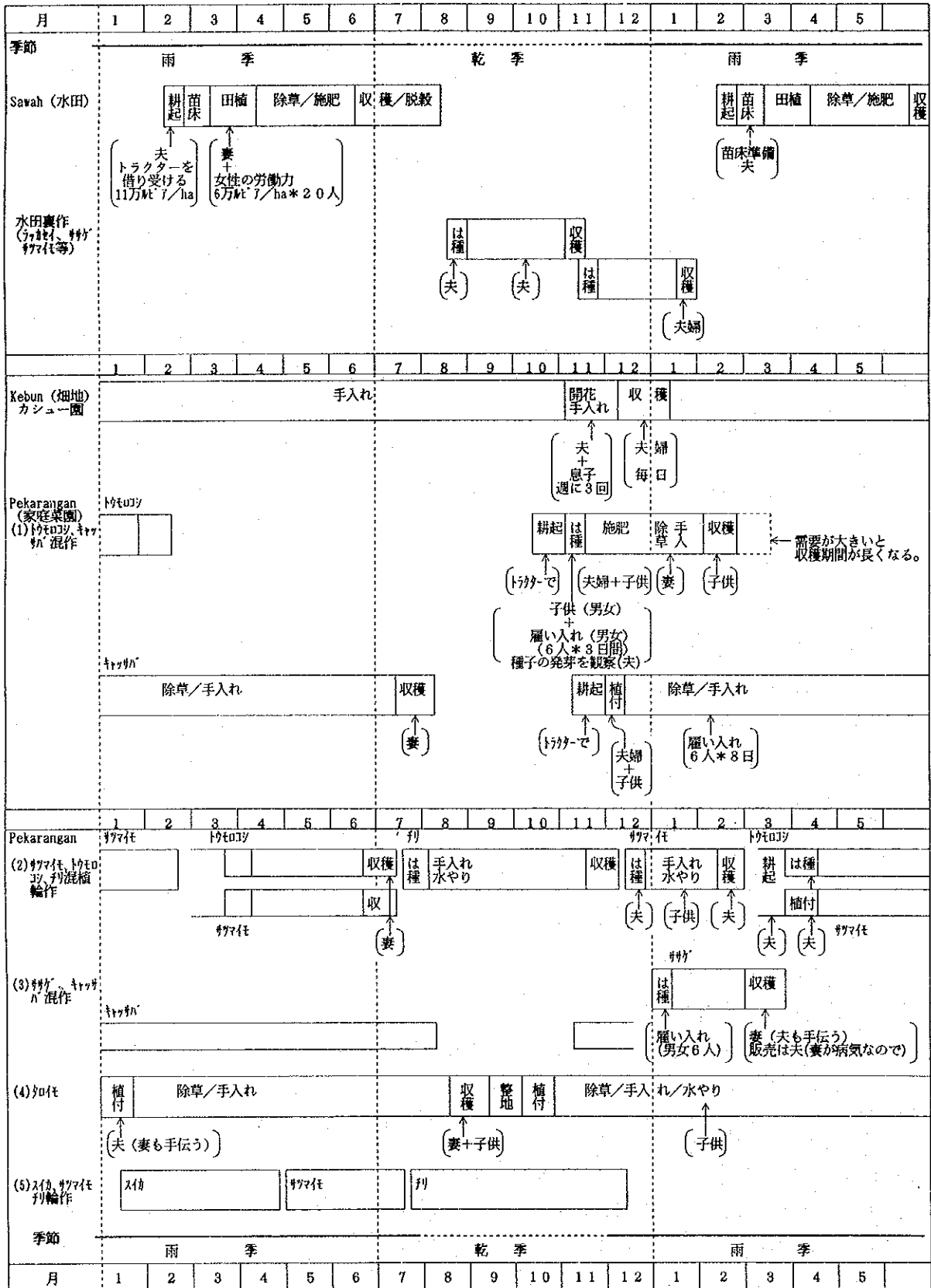


図4-4-10 カディムン、スラム夫妻の作業季節暦 (ラノメート村、ジャワ人)

(聞き取りより作成)

1993	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994	1994
Nov.	Dec.	Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.							
Sawah 稲作	水稲 ase / padi 播種 (田床) 田植 (耕起)	田植 労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間	労働交換 1/5 開始 Atta salo Caming Riattang Ajuarai 3 週間
施肥作業	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26	施肥作業 施肥① → 施肥② 1/5 (25日) → 2/9 (45日) → 施肥③ 3/26
Kebun 畑地	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu	キャサバ 田 1/5 開始 lame aju / ubi kayu

図 4-4-11 アブドゥル、ヤンナ夫妻の作業季節暦 (パラッカ村、プギス人)  
(聞き取りより作成)

しかし、彼／彼女たちの意識としては、夫婦で同じように作業していると考えていることが聞き取りから窺われる。確かに女性も販売を担当するなど経営、管理に関与しており、積極的に活動している姿が見られる。しかし農業普及員などからの情報は夫が主に入手している、換金性の高い作物の経営は夫の担当であるなど、客観的には差異が見られている。

そこで、図4-4-12のように具体的な一日の活動を聞き取ってみると、妻が生産活動に加えて家事労働などの再生産活動を負担している、などどちらかに労働過重が起きている可能性もある。とくに生産体系の変化などによってどちらかに労働のしわ寄せが来ていないかに留意することが必要であろう。また、この調査時期はちょうどラマダン（断食月）にあたり、図4-4-12は一年のうちのある特定な一時期を示しているに過ぎない。このように季節によって労働内容が変化することが予想されるので、それぞれの季節について調査することも必要となる。

長いスパンで一生のできごとを追っていくと、それぞれの局面における父／母としての役割、夫／妻としての役割、地域のリーダーとしての役割等がみえてくる。例えばカディムン、スラム夫妻の結婚の経緯では、妻となるスラムさんの意見は全く聞かれず、決定は双方の父親たちによってなされたが（本文54ページ、17行）、このようなできごとから、意思決定において男性／女性の意見がどのように反映されているかが浮かび上がってくる。

#### (5) 収集したデータの統合

上記の調査から収集されたデータをどのように整理し、提示していくかは非常に重要なプロセスである。村人やプロジェクト関係者に理解しやすく、討議の材料として用いやすい形にとりまとめていくことが必要となる。ここでは、対象地域において生活様式の異なるグループ間の比較を通して地域社会の成り立ちと各グループの生活様式の特徴を明らかにする方法、社会／ジェンダー分析で用いられる活動プロファイルと、図などのメタ言語によって表現することにより情報をまとめていく手法の3つの手法を説明する。

##### a. 想定される受益者グループ間の比較検討表

表4-4-3は開発の対象となる地域とそこに居住する部族、民族の違い、資源をどのように取り込んでいるかの違い、これらのデータに男女の差異を重ね合わせてデータを統合したものである。

この表から明らかになってきたものは相違点ばかりではない。女性の活動の共通性があらわれてきている。今回調査の対象となったスラウェシ島の3つの社会カテゴリーに属するインフォーマントからは、いずれも基本的生活単位である家族の食事やその食事に変化を与える香辛料、調味料の類や家族の健康保持のための薬草等、生活を持続していくための農林産物の資源の確保に女性が大きな役割を果たしていることが示された。南東スラウェシ州での先住民であるトラキ人、移住民であるジャワ人、そして南スラウェシ州のブギス人、すべてのインフォーマントから、女性が維持し持続させてきた生活型農林業の姿が確認されている



夫	時刻	妻
睡眠		睡眠
起床、一日の準備	3:00	起床、かどの火をおこし湯沸かし、朝食の準備、子供を起こす
朝食、休息	4:00	朝食、後片付け
祈り	5:00	住居の掃除
畑の手入れ	6:00	井戸で衣類の洗濯
コンクリートブロック づくり	7:00	お菓子作り
	8:00	
	9:00	販売用のササゲ収穫
	10:00	
帰宅後水浴び、休息	11:00	水浴び、休息
祈り、休息	12:00	祈り
	13:00	夕方の祈り (buka) のためのお菓子作り
畑でササゲの収穫	14:00	
	15:00	
	16:00	
	17:00	
水浴び、祈り、休息	18:00	水浴び、夕方の祈り
夕方の祈り、休息		夕食の準備
モスクへ行く。	19:00	
モスクから戻る。	20:00	
夕食	21:00	夫の帰宅を待ち家族で夕食
就寝		後片付け
	22:00	就寝

生産活動
  再生産活動

図4-4-12 断食月間のカディムン、スラム夫妻の一日の過ごし方 (ラノメト村、ジャワ人)  
 (聞き取りより作成)

表 4-4-3 インドネシア基礎調査結果のまとめ

対象	生活基本単位 A(家族)	生活基本単位 B(家族)	生活基本単位 C(家族)
居住地区	南東スラウェシ州クダリ県 開拓地域	ラノメト村 都市近郊村	南スラウェシ州 バル県バラッカ村 伝統的村落 山地村
部族名	ジャワ(Javanese) 移住民	トラキ(Tolakinese) 先住民	ブギス(Buginese) 先住民
居住単位	夫婦家族中心 (結婚当初妻方の家に同居)	夫婦家族中心 (同一敷地内に子供の家族同居)	夫婦と娘の直系家族
収入形態	農業中心(積極的経営) コンクリート製井戸杵生産 (副収入:夫)	農業、大工仕事(夫)	農業収入、子供からの仕送り (息子のマレーシア出稼ぎ)
主要換金作物	水田(米)+畑(カシューナッツ、キャッサバ、サトイモ、ササゲ等)	水田(米)+畑(カシューナッツ)+森林産品+サゴ林	水田+畑(ピーナッツ等)
農耕地	水田(2.5ha)、屋敷地+家庭菜園+隣接畑地(1.25ha)、他村にある畑地(3.0ha)	水田(2ha)、畑地(5.5ha)、湿地(1.5ha)、森林(20ha)、屋敷地(2ha)	水田(0.65ha)、畑地(0.1ha) 屋敷地住居の周囲に少々
土地利用	平均以上の面積をもち、集約的な土地利用をする	畑作中心から水田を加えた農業形態に移行中。	水田を中心とした土地利用が見られる。
社会的地位	夫は、農民グループリーダー、妻は元女性リーダー	夫は元集落のリーダー(区長)	夫は元集落のリーダー(区長)
生活型農林業	全体的な農地経営面積が大きく、その分、Pekarangan も大きく確保され、ジャワ本島の形態をスラウェシでも目指しているのが示された。 発達したジャワ農民屋敷地の Pekarangan にみられる養殖池も用意されている。	かつて依存の大きかった森林自体の減少があるが、現在の生活でも森の産物利用が多い。 土地所有が大きく樹木を中心とした土地利用が見られる。 樹林を含めて Pekarangan に多くの植物資源を栽植し、これを生活に多用途の利用がなされている。	住居の周囲には菜園のようなわずかな土地もなく、見た目にも Pekarangan の発達が見られない。 量的な依存は少ないものの種類数は多い。 量的に少ない分を Kebun を利用することによってカバーしている。
ジェンダーに関する認識	農林業の生産活動において男性は水田稲作、換金作物との関わりを明確に示している。 これに対して女性は家族の日常の食事に供される自家消費用の植物(野菜や果物、香辛料)とのかかわりが強い。 生活型農林業の維持は女性が分担している。 土地の名義は夫が、農産物販売からの収入は妻が管理している。	作業分担において男女の役割の違いが存在する。 男性が換金作物に関するプロジェクト情報の入手などを分担していた。 しかし、男女が共同する部分も大きく、意識としてはジェンダー差異の認識は強くない。 生活型農林業の維持には母親、娘という具合に、女性によって継承されている側面がトラキのインフォーマント場合、見られた。	男性は男女の労働分担について対等だとする意識が認められる。 しかし、男性は稲作、換金作物に関する意識が明確であるのに対して女性は屋敷周りや畑の家族の健康や食事の変化を意識した香辛料や調味料、薬草、果物等森林地の資源にも及ぶ。 小さな Pekarangan でも生活型農林業の考え方が示され、特に女性の生活型農林業に果たす役割の大きさが男女を比較することによりうかがえた。

表4-4-4(1) 活動プロフィール：カディムン、スラム夫妻（ラノメト村、ジャワ人）

活 動 内 容		ジ ェ ン ダ ー 別 活 動 分 担		
		男性	女性	備 考
生 産  活 動	◎農業生産			
	水田			
	- 耕起	★		
	- 用水管理	★		毎日水田に行き、水位を点検。
	- 田植え		★	20人ほどの女性を3日間雇用。大半がジャワ人。
	- 施肥	?	?	
	- 除草、手入れ	★		毎日水田に行き害虫等を点検。
	- 稲刈り	★	★	村内外から男女18人を雇用。収穫量の6分の1を現物支払。
	- 脱穀	★	★	夫妻は監督。
	水田裏作（野菜、落花生）			
	- 耕起	★		ハンド・トラクターを借り、耕起。
	- は種	★★	★	夫が忙しいときは妻も手伝う。
	- 除草、手入れ	★	★	
	- 水やり	?	?	
	- 収穫	?	?	
	カシュー園			
	- 除草、手入れ	★		週に3回、夫と息子がおこなう。
	- 収穫	★	★	収穫時期は毎日作業。
	家庭菜園			
	- 柵作り	★		
	- 鑑賞用植物手入れ		★	娘。
	- 野菜畑耕起	★	★	ハンド・トラクターを借り入れ。
	- は種、植え付け (トウモロコシ、キッサバ)	★	★	子供と外部からの労働力雇用(男女6名を3日間)
	- 植え付け (サマイ)	★		
	- は種 (サガ)	★	★	子供と外部からの労働力雇用(男女6名を3日間)
	- 植え付け (クロイ)	★★	★	妻も手伝う。
	- 野菜の水やり		★	乾季の間は妻と娘が井戸から水を汲んで水やり。
- 除草	?	?		
- 収穫 (トウモロコシ)		★	妻と娘。	
- 収穫 (キッサバ)		★		
- 収穫 (サマイ)	★			
- 収穫 (サガ)	★	★★	ときどき夫も手伝う。	
- 収穫 (クロイ)		★	妻と娘	

表4-4-4(2) 活動プロフィール：カディムン、スラム夫妻（ラノメト村、ジャワ人）

活 動 内 容		ジ ェ ン ダ ー 別 活 動 分 担		
		男性	女性	備 考
生産活動 (続き)	植樹（ガマル）	★	★	ガマルを多目的に利用（被陰、土壌流亡防止、猪対策用垣根、薪、ササゲの支柱、緑肥等）
	家畜 - エサやり	★		息子。
	- 水やり	★		息子。
	手工芸品等製作	?	?	
	市での生産物販売	★	(★)	以前は妻の役割であったが、妻の罹病後は夫が代わりに販売。
その他				
再 生 産 活 動	調理		★	
	水汲み（飲用）	?	?	
	薪集め	★	★	森へ夫婦で取りに行くか（週に一度程度、往復3時間必要）、購入する（価格：1,500ルピア/30kg）。
	洗濯		★	
	掃除 - 家屋		★	
	- 屋敷地		★	
	家族の健康管理		★	
	- 家族が病気の際の 薬草の調達		★	
	家屋の建築、改修	★		ゴトンロヨン（相互扶助）によって。男性は労働提供、女性は炊き出し。
	大工仕事（家具製作等）	★		
	井戸・便所の補修工事	★		
	屋敷地内の排水路の整備	?	?	
家庭菜園の手入れ		★	娘。	
その他				
地 域 活 動	◎共同の地域開発活動			ゴトンロヨン（相互扶助）によって。男性は労働提供、女性は炊き出し。
	道路建設	★		
	水田開こん	★		
	井戸建設	★	★	
	モスク	★	★	
	女性グループ活動		(★)	罹病前は活発に活動していた。
	農民組織活動			一つの農民グループのリーダーを務めている。
その他				

★ 担当する  
★★主に担当する  
? 不明

のである。このようにデータを統合し、比較することにより、それぞれの社会カテゴリーの特質が示され、全体像がより明確になってくる。

#### b. 活動プロフィール

ジェンダーの視点を中心に家族間の男女の作業分担を表にしてまとめたものが活動プロフィールである(表4-4-4)。これはジェンダー/社会分析の一連の流れの中で地域の現状及び男女の役割分担の状況を把握するための一つ的手段として用いられているものである。対象地域でどのような活動がおこなわれているか、またそれぞれの作業を実際誰が分担しているかをプロジェクト担当者たちが認識することにより、開発計画などによって投入されるインプットの正当な受益者が同定されるようになることが期待される。詳しくは社会/ジェンダー分析を専門に扱った文献を参照されたい。

#### c. 図や写真などのメタ言語を用いた視覚的なデータ統合

これは地域の人々の生活の総合的な把握及びデータの共有(地域の住民と、地域の活動エージェントと、あるいはその他プロジェクト関係者と)を重視してのプロセス法である。そのために一覧することで特徴やイメージが浮かびやすく、情報を共有しやすい情報整理が重要となってくる。

たとえば3つのインフォーマントからの情報をもとに利用資源の位置と利用内容を示した図4-4-1(62頁参照)は、視覚的であるために各インフォーマントの資源利用の特徴の比較もしやすく、またイメージ的な図なのでインフォーマントと共に作成していくことも可能である。そこで地域の住民と対話する際の意見交換、コメント、訂正や、より詳しい情報を得るにあたっての土台として利用するのにも適している。また、インスタント写真を用いての植物資源カタログ作成も、視覚的な情報であることからインフォーマントと調査者の相互の意思疎通のために非常に有効であった。

このように、とくに言語の壁(他の言語との壁、非識字のための壁など)や文化的な価値観の差異が存在することが多い現地の住民と外部者(普及エージェント、プロジェクト関係者など)が対話をしていく、あるいはより多くの地域住民が一つの活動に参加していけるためには、共通の理解を得やすい図や写真などのメタ言語によるデータの整理をしていくことが有効であると考えられる。

(吉野 馨子)

### 5. 農業・農村開発におけるベースライン調査のあり方

#### (1) ベースライン調査(農村生活総合調査)の役割

今回試みた調査法は、SGA手法を一部取り込んだ農業・農村開発プログラムのためのベースライン調査方式ということが出来る。開発初期に行われるベースライン調査、つまり開発直

前の社会、生活の状況を資料やデータとして把握するための基本的調査である。そしてそれは、期間的には1調査地域に実質調査期間（フィールド滞在期間）が2週間前後で実施可能な社会ジェンダー視点を取り入れた調査手法である。結果的には、RRA手法とかなり近似した方式になっている。

この調査の役割は、農業・農村開発プログラムにおいて開発の直接対象となる地域住民の生活の変化に対応したミクロ的な視点からのサポートを行う際の留意点を抽出することにある。農村女性の活動をもとに描かれた農村生活の状況をもとに男女が共生して実施をする生活改善のボトムアップ型のプログラム形成を行う基盤をつくりだすことになる。開発計画がマクロ視点から実施され、対象地域にトップダウン型の性格をもつものに対して地域社会の社会、生活様式にフィットするように調整をし、この要素を組込むことを可能にするデータや資料を用意する。

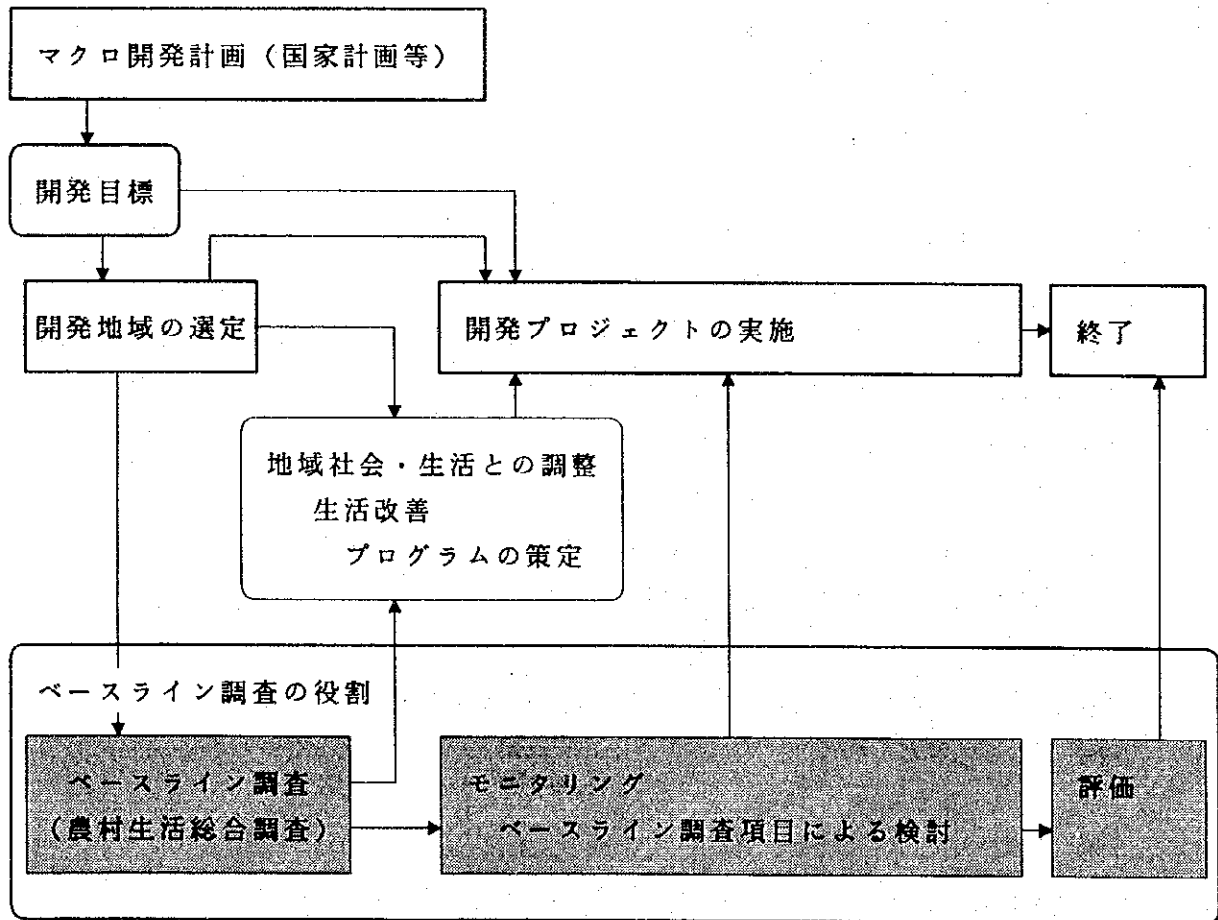


図4-5-1 ベースライン調査役割と位置づけ

開発過程が地域社会や生活の変化を伴うものであり、地域住民の生活に直接間接に影響を与えることになる。開発が外的な要素としてインプットされ、その反応の仕方、つまり対象社会並びに生活への変化や影響の表れ方は、地域固有なものになることがある。これらの反応を的確にとらえてゆくことが必要になってくる。したがってこのベースライン調査は開発の効果や影響などを測定するための基準となる性格をもっている。つまり、モニタリングや評価におけるデータの提供がこの調査によって得られたデータによって可能になる。

農業・農村開発は、特に地域社会やそこでの生活に大きな影響を与えやすいプログラムである。この際の最も大きな影響は、開発の対象となる地域の経済的格差の発生による新たな貧困をつくりだすことであろう。具体的には、貧困者、少数民族、女性世帯主、子どもそして高齢者などがその影響を受けやすくなる。また、これらの社会的弱者がターゲットグループtarget groupsになり、これらの人びとの生活が向上することを目標とするものもこの種のプロジェクトに存在する<sup>32)</sup>。

## (2) 開発の効果をどのような視点で測定するか

### a. 社会・生活の変化の速度

社会変化、生活状況の変化で技術的側面が非常に早く変化する。開発の当初で利活用していた資源が開発の過程でどのように変化するのか、この測定が大きくなる。たとえば、今回の調査でも、トラキ族が森にあったサゴヤシを自らとって幹にある多量の澱粉を中の繊維を打ちほぐしながら水を注いで精製するという手間をかけて取っていたものが、屋敷地等に植えてあるにもかかわらず、製品化されたサゴ澱粉を購入するようになったりした変化がうかがえた。南東スラウェシ州の農業・農村開発プロジェクトの進行とともに現金収入が増えること、手間が大変大きいサゴ澱粉精製を省力化するために製品化したものを用いるようになってきている変化が見られた<sup>33)</sup>。

しかしながら、部族ごとに代表的な農家を対象とした今回の調査では、農家の土地利用の仕方が従来保持してきた部族の固有の土地利用形式を目指して整備している姿も浮かび上がった。ジャワ族では、ジャワ島の居住地で良く発達した家庭菜園、プカランガンpekaranganをもっていることを知られているが、雨量の少ないスラウェシ島に来てジャワ島の伝統的な土地利用形式を目指していること等が今回の調査で判明した。このことは、既に社会組織専門家の調査からも報告が出されている<sup>34)</sup>。

このような開拓に近い開発地域では、異なる生活様式をもった部族間で隣り合わせに居住することがあり、それぞれの部族の生活観が異なり、これに関連して土地利用等の求める方向等が異なることが生じる。また、異なる生活様式をもった部族間でいわゆる文化接触(culture contact)が生じて文化変容(acculturation)が見られる。トラキ族は、元来、竹を使用しなかったが、ジャワ族がしきりに使うのを見て竹を用いた生活をするようになってきたなどの変化も見逃せない。

開発効果の典型例であるが、これから開始される南スラウェシのパラッカ村では、農業普及員が施肥のやりかたを細かく丁寧に指導した経緯がある。これをインフォーマントは忠実に実行して従来の収量の3割増を達成したという。開発前にこのような調査をすることにより、開発プログラムが検討され、農業技術や生活の状態がどのような形で営まれるかを記録しておくことの重要性が今回の調査でも実証できたといえる。

農業技術や資源をつかった生活の仕方は、開発によって非常に変化しやすい側面をもっている。しかし、それぞれの社会によって新しい技術であっても何を積極的に取り入れて、取入れないのか様々な場合が生じてくる。そのことは、ジャワ族とトラキ族の土地利用観についても言えるし、サゴヤシ自体が南東スラウェシでは近年減少しているといわれており<sup>35)</sup>、収入増加などが関連して製品化したサゴをローカルマーケットでもとめるなどの動きに変わってきたことがうかがえる。

これらの資源の製品化等はずっとも変化の早い事項であるが、土地利用形態や男女の役割分担、食習慣、社会規範などは変わりにくいものの例といえる。水稲作中心の農業技術移転では、米食を主体とするジャワ族の場合には明確な反応を示すが、トラキ族のようにサゴのような森からの資源に多く依存していた生活体系であれば、水稲作技術に対して鈍い反応を示すことにもなる。このように生活の仕方が開発の手法や内容に大きくかかわってくる。

#### b. 生活は男女双方の視点が必須：ジェンダー視点

それでは、対象地域の住民の生活の仕方をどのように把握するかということが問題になってくる。生活の仕方が部族等の文化的差異によるものが大きいのが大きい、その部族の生活の仕方をとらえるには、ここで試みたように男女という視点を基本に据えてデータを取ることが最も有効である。いわゆるジェンダー視点での調査が不可欠になるのである。もちろんこれに加えて、異なった年齢の代表や経済的階層の違う人など属性の異なる他の成員の調査も加えられれば越したことがない。これまでどちらか一方のデータや調査によってなされていたことが、ジェンダー視点の調査を加えることによって多岐にわたる対象地域の生活に関するデータが得られることになる。

#### 生活改善プログラムの内容例

- ① 井戸など生活用水の確保
- ② 燃料と改善カマド
- ③ 社会林業：社会による森林の保全と利活用
- ④ 農産加工：地域生活の拡充と共同化の進展
- ⑤ 栄養改善／健康維持：保健活動の連携
- ⑥ 子どもの生活環境改善
- ⑦ 高齢者の社会参加
- ⑧ 貧困者：女性世帯主対策（家内工業／生活技術）
- ⑨ 労働軽減／農作業改善
- ⑩ 家計管理（お金の使い方：貯蓄：借入金）
- ⑪ むらづくり／生活環境整備
- ⑫ 女性グループの組織化
- ⑬ ゴミ処理方法



- (3) 生活改善プログラムが必要になる：地域住民による農村生活の再確認と再評価の過程を設定する

生活の大きな特徴のひとつとして、生活を営んでいる本人にとって自らの生活の仕方をうまく説明できないことが上げられる。異文化の人間に接することを鏡にして自らの生活の仕方を客観化することが行われる。このような機会を開発過程はもっている。そして自らかかわっている問題を明確化することが可能になる。普及活動の大きな役割である。これらの問題発見型のプロセスは、自ら問題を解決することを可能にするプロセスでもある。そしてその対象となるのは、生活改善の問題である。これらに対応する生活改善プログラムの代表例として内容は、次の表に示したものがあげられる。

これらの生活改善の課題を取上げるには、ベースライン調査によってつくった「生活資源カタログ」、「資源マップ」などの活用が可能である。

- (4) どの時点でベースライン調査をするのが効果的か

ベースライン調査をプロジェクト・サイクルのどのようなときに組込んだらいいのか。図4-5-2は、JICAのプロジェクト方式技術協力の手順を示したものである。このプロジェクトサイクルの「事前調査」の段階に相当する。

プロジェクトが実施段階になっても住民参加型の調査の実施が継続的におこなわれることが考えられる。

また、プロジェクト・サイクルにおける中間段階でもベースライン調査に準じた調査が行われることが期待される。そしてこれらの調査結果からプロジェクトの評価についても時系列で開発の効果、影響が測定が可能になる。

- (5) ベースライン調査を実施する上でどのくらいの期間が必要か

ベースライン調査を実施する調査期間は、町村規模を対象とする場合、生活様式の異なる社会集団の数、集落数、貧困状態、集落の世帯数、ならびに人口によって左右されるが、RRAが提唱する調査期間と同程度の調査を想定している。RRAは、「開発ツーリズム」になることを2つの調査時間から指摘している。1つは Quick and Dirtyであり、短期間の調査におけるバイアスを、2つ目は Long and Dirty といい、伝統的な学術調査の場合には膨大な量の時間と費用をかけることから生じるもので、それ自体をまとめて整理しなくては成らないことを指摘している。そして適度に短く、適度にクリーンな調査手法の必要性をといている。「目をつぶれるものはできる限り目をつぶり、あまりに神経質に正確さを追及しない」という姿勢を調査態度として上げている<sup>36)</sup>。具体的には、調査地域に4日未満の滞在では開発ツーリズムに陥りやすいこと、3週間以上では時間のかけ過ぎを指摘している<sup>37)</sup>。

農村生活総合調査では、データを5～10セット、つまり、インフォーマントの基本生活単位の数であれば、現地調査が2週間程度で可能になる。

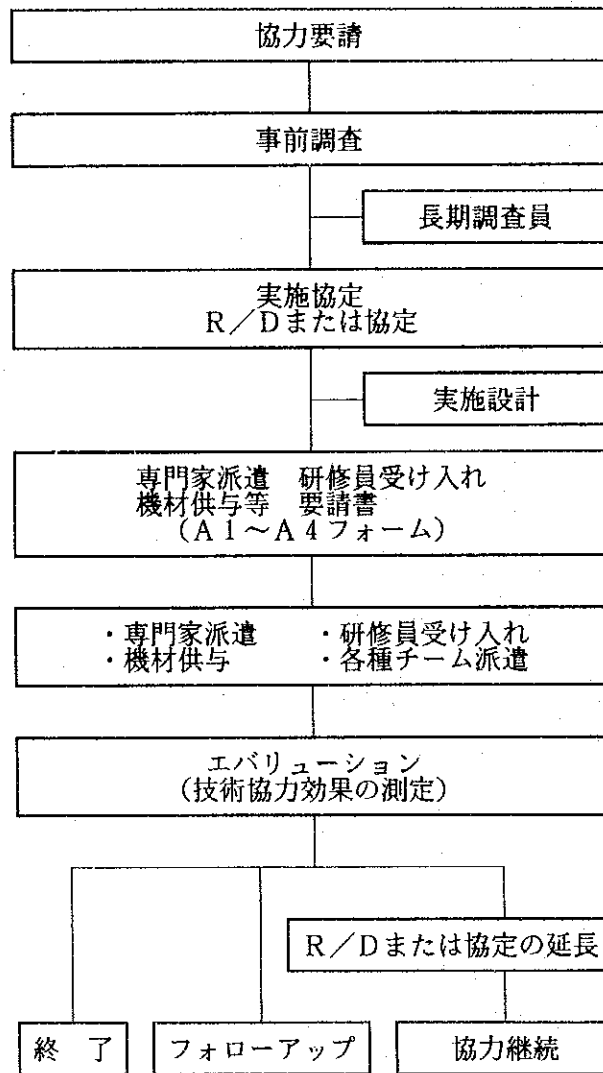


図4-5-2 プロジェクト方式技術協力（プロ技）の手順

(6) 農村生活総合調査とニーズ調査

今回検討してきたベースライン調査、農村生活総合調査と従来の開発を実行していくための直接的な調査とは性格を異にする。農村生活総合調査は、現地の人びとから生活を通じて学んでいくという基本姿勢をもっている。このあたりは、USAIDが主張しているRRAの基本理念とかなり一致する考え方である。開発目標をたてそれを効率良く進めていこうとするためのデータをとる調査と対象となる社会とそこでの生活の仕組みをとらえようとする調査では、その対象や調査内容は当然異なってくる。開発に対する地域社会のニーズをとらえるためには、対象となる地域社会の生活の仕組みをまずとらえる必要があり、十分な農村生活総合調査によってニーズの背景を説明することができる。

住民のニーズをどのように把握するのかについては、大きな課題である。「何が必要ですか？」式の質問によるニーズ調査には問題設定を具体化しても常にその結果が現在の生活状況と

乖離した結果を表現するに過ぎない場合が多い。この種のニーズ結果のクライテリアは、無いのに等しい。生活の仕組みをとらえて、そのニーズがどのように位置づけられるのかを優先していく方途が先である。生活の仕組みを問題を抱えている社会階層—これがターゲット・グループに相当する—と、地域集団のリーダークラスの生活の仕組みを比較することによって地域の人びとが価値づけているよりよい生活の方向性が見出される。それをもってニーズとすることが考えられる。社会のリーダー層がどのように資源を生活の中に取り込み、より充実した暮らしを営もうとしているのかという点と問題を抱えた社会階層との間でどのような資源アクセスやコントロールへの障壁は何なのかを比較しながら把握することがより一層、対象社会の生活の仕組みの理解を可能にする手立てになる。

CIDAはSGA手法でニーズを Practical Needsと Strategic Interestsに分けている。前者は、具体的には、生存のために必要な食料や簡易な住居用の小屋、所得、身体的安全性をさしており、ジェンダーの関係でいえば、対象社会において既存の社会や文化に規定された従属的な男女関係を変えることはできない。これに対して後者は、一般的に言えば、資源コントロールや資源から得られる便益のコントロールのもとで女性の地位の弱さや不利益を受けている男女関係そのものを変えてしまうとするニーズである。例えばミシンを使用することが許されている女性が裁縫仕事をしてなにがしかの所得や賃金を得る場合、自分でミシンを所有している場合と比較すると非常に弱い立場におかれてしまう<sup>39)</sup>。つまり、貧困状態から抜け出ることが困難な人びとが、食料や簡易な住居用の小屋を欲しいとしたなら、Practical Needs だけでは問題を解決できずに、不利益な社会での従属的な地位に押しやられたままであるということであり、この社会関係を解決するには、Strategic Interestが必要になってくるのである。

今回の調査手法を用いることにより、以下のようなニーズの把握方法が可能となる。しかしながら、部族間により、職業階層、宗派などによりその求める暮らしの姿は異なってくることは、配慮しなくてはならないだろう。多様なニーズをある程度の階層差で大まかな生活の仕組みを理解するためのデータである。

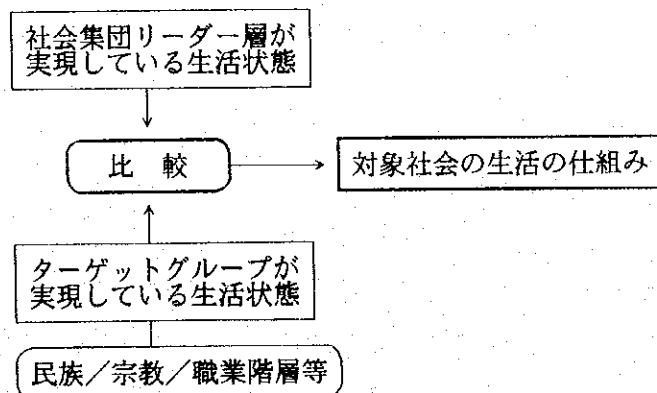


図4-5-3 異なる階層における生活ニーズ

## 6. 残された課題

本調査研究を実施した経過から残された問題が多々存在する。第1に、ベースライン調査として開発当初に予定されるこの種の調査手法を考察するのにあたって開発によって発生する変化を予め想定できないかどうかの問題がある。また、第2には、従来モニタリングや評価といわれていた開発目標との関係における直接的な目標値の達成に関する方法と今回検討されてきた調査手法との関係である。第3には、すでに開始された農業農村開発プロジェクトでの現時点でベースライン調査をこの種の方法で実施することが可能かどうかという応用問題である。第4番目には、もっとも基本的な事項であるが、今回検討してきた手法について、本番と同じ条件で実施していないことの問題である。この4点を簡単にふれる。

- 1 ベースライン調査は、開発を開始する直前に対象社会がどのような状況にあるのかを把握する基本的な調査である。開発によってマイナスの効果が発生することも考えられるが、開発のネガティブ要因として対象社会のなかでの紛争を大きくしたり、社会階層間の経済的な格差を拡大したりすることなどの要因が開発によってなされないかということも調査項目にあげられることが期待される。たとえば、JICA農林水産開発調査部が検討してきた『水産開発調査に係る環境配慮ガイドライン』では、環境を大きく社会環境と自然環境の2つに大別して項目を用意している。本調査とかかわる指標として社会環境の例を列举してみよう。社会環境は大きく1. 社会生活、2. 保健・衛生、3. 史跡・文化遺産・景観等に分けられている。このなかで「1. 社会生活」の項目は、「関連住民の住居生活、経済活動、交通、コミュニティ、制度・習慣等の既存の社会生活に悪影響を及ぼさないか」というスタンスで項目立られている。さらに中項目では、(1) 住民生活（計画的な住居移転、非自発的な住居移転、生活様式の変化、住民間の軋轢、先住民・少数民族等、陸上交通量の増加、その他）、(2) 人口問題（人口増加、人口構成の急激な変化、その他）、(3) 住民の経済活動（経済活動の基盤移転、経済活動の転換・失業、所得格差の拡大、その他）、(4) 制度・慣習（漁業権・水利権の再調整、組織化等の社会構造の変更、既存制度・慣習の改革、その他）があげられている。ベースライン調査とこの環境配慮項目との関係等まだ関連づけて考察することの必要性は、今後の大きな課題の一つといえる。
- 2 従来から実施されてきたモニタリングや評価という過程では、先にも述べたように開発の目標という具体的、直接的な評価基準が中心であった。本調査では、そのような直接的な視点でモニタリングや評価を実施せずに開発という外的なインパクトに対して対象社会の生活の仕組みがどのように変化するのかという視点を採用している。前者は、開発に直接的にインパクトが生じると予想されるポイントのモニタリングであり、評価である。今回の手法だけでは完全ではなく、従来あったモニタリングや評価の手法との併用が期待される。両視点での相互アプローチによる評価がどのようになるのかも残された課題となる。

- 3 ベースライン調査の応用としてこの手法を開発プログラムが進行しているプロジェクトで実施することにより、女性の視点やW I D配慮項目の設定等組み合わせたいける協力内容が拾い出せる可能性がある。このことも既存のプロジェクトを対象にして実施してみる試みが残されている。今回検討してきた手法のより一層の応用が可能になるのではないだろうか。
- 4 女性の活動を配慮した調査手法としてベースライン調査は、総合的な調査であり、先に述べたようにフィールドで2週間程度の調査期間が必要であると考えられる。短期間で実施しなくてはならないことが要求されるが、社会的、文化的要因が多いほどこの理解や分析に多くの時間を費やすことになる。この場合、社会文化的な背景を始めとして、大学等を含めたローカル・コンサルタントの協力が必要になるのであろう。現在の手法を現実化するためにも総合的な調査を実践的な期間を用いて実施することが不可欠がどうしても必要になると考える。

(富田祥之亮)

#### 注

- 1) 国連食糧農業機関 (F A O) 投資センターでは、1992年に『農業投資プロジェクトデザインにおける社会学的分析』 FOOD AND AGRICULTURE ORGANIZATION OF THE UNITED NATION, 1992, Sociological analysis in agricultural investment project design, FAO INVESTMENT CENTREという報告書をまとめている。世帯残存戦略、貧困の軽減、農業-非農業活動、ジェンダー問題、住民参加型資源管理、技術移転といったテーマを掲げ、この診断研究diagnostic studies として社会学的アプローチを検討している。この研究で、社会学的分析とは人類学的分析、ジェンダー分析、便益分析、社会インパクトアセスメントをイメージしている。
- 2) 生活基本単位 この用語は、アフリカ社会のように家族からなる世帯以外の世帯、たとえば男性同志既婚者の世帯等の存在があり、生活基本単位=家族世帯とはいえないからである。インドネシアでは家族からなる農家世帯を中心にしてデータを、資源、空間、時間の多次元の視点からデータをとらえられるように調査を組み立てた。このような基本的立場からデータを収集し、特定の生活基本単位におけるデータの総合的な整合性がとれるようにした。データ対象世帯の位置づけが他の地域社会全体性の中で行えることがこの調査の信頼度となる。
- 3) デサとクルラハン desa/Kelurahan デサは、ジャワ社会の村の意味。農村部の行政村をデサ、都市部の行政村落をクルラハンという。石井米雄監修、1991、『インドネシアの事典』、同朋社出版、「デサ」の項。
- 4) 西村美彦、1993、『農業・農民組織調査報告書(州外コントロール地区)-西スマトラ地区、中央・東ジャワ地区-』。
- 5) イスラム暦で第9月を指し、イスラム教徒がこの1ヵ月、日の出から日没まで断食をする季節である。インドネシアでは、夜の終わりに、サフルという食事をとり、日の出1時間30分前から日没まで断食(プアサ)を行い、水を含んだ一切の飲食が義務として禁止される。

- 6) 前出、注3)を参照のこと。
- 7) Min. of Agriculture, Government of Indonesia. Final Report on Integrated Agricultural and Rural Development Project in Sulawesi Tenggara Province. 1990.
- 8) ラノメト村役場に掲示されていた村のデータより。
- 9) 7)に同じ。
- 10) 8)に同じ。
- 11) 8)に同じ。
- 12) 西村美彦, インドネシア国南東スラウェシ州農業農村開発計画プロジェクト概要資料: 農村生活改善のための女性の技術向上検討事業会議用。国際協力事業団。1995。
- 13) ラノメト村人への聞き取りによる。
- 14) 8)に同じ。
- 15) 村の伝統的治療師、ドゥクン (Dukun)
- 家族が病気になった場合、保健センターに行くこともできる。しかし保健センターは常時開設しているというわけではなく巡回制のため、村人はトラキ人もジャワ人もドゥクンの葉草や呪術による治療にまだまだ多く依存している。とくに腹痛や発熱などの一般的な症状や出産時にはドゥクンのところに行くことが多い。そのため、出産を介護する女性のドゥクンに対しては政府も訓練を与えるなどして未熟練な技術のための妊産婦及び新生児の生命の危険を少なくする対策を取っている。ドゥクンの診察料は一定ではなく、現金や品物を心付けというかたちで支払うことが一般である。(以上は、ラノメト村に在住するドゥクンである Abdul Rahab氏 (ジャワ人) よりの聞き取り。)
- 16) 13)に同じ。
- 17) 農用地整備公団, 平成5年度海外村づくり基礎調査事業: インドネシア国調査報告書: スマトラ南部地域・南東スラウェシ州地域, 1994.
- 18) ゴトンロヨンは人々の間の自発的相互扶助を意味する。災害の被害者を隣人たちが助ける、公共施設建設のための協同無償労働などが代表的な例である。現在ゴトンロヨンは政府によって極めてイデオロギー的に強調されており、公共事業を地域住民の無償の奉仕でおこなうことなどは公のゴトンロヨンの部分といえよう。一方これとは別に現実の日常生活においては無数の自発的な相互扶助がゴトンロヨンと形容されておこなわれている(参照: 石井米雄他編, インドネシアの事典, 同朋舎, 1991. )。
- 19) 13)に同じ。
- 20) ラノメト村村長Tasman Lamuse氏への聞き取りによる。
- 21) 小田島成良, 南スラウェシ州協力隊村落開発案件化関連事前調査: 短期緊急派遣シニア隊員報告書, 国際協力事業団, 1993.
- 22) パラッカ村村長 Ahmad Patta 氏よりの聞き取り。

23) 22) に同じ。

24) 21) に同じ。

25) 22) に同じ。

26) 村の共同井堰

乾季の乾燥が著しい同村において乾季の灌漑は重要である。そのため、村内を流れるパンガ川をせき止めての井堰が20を超える数でつくられている（さらに5つの揚水灌漑施設もつくられている）。これらは乾季ごとに男性たちの共同作業によってつくられる（揚水ポンプの場合は、水代を所有者に支払う形となる）。しかし取水すべき水源もない地域もあり、水条件は厳しい。出典 注21)。

27) 22) に同じ。

28) ブギス人の家は高床式で土台を支える柱は地面に固定されていない。そのため屋敷の移転の必要があると、柱を持ち上げて家事引っ越す形をとる。家財、壁等はずして持ち上げるが、それでも大変な重量なのでゴトンロヨンにより大勢の男たちの協力でおこなわれる（注18参照）。しかし、このように大変な作業でもあり、移築はそう頻繁にあるものではない。パラッカ村では土砂崩れなど、現在の居住地に危険があるような場合に住居の移転をおこなうようである。近年は1962年に山あいのパンガ集落から一部村人が下に土地を見つけて降りてきた。また、村レベルのかなり大規模な移転は1945年にあったそうである（インフォーマントよりの聞き取りより）。

29) 22) に同じ。

30) 21) に同じ。

31) 渡辺（1987）によると、西ジャワにおいてブカランガンがブカランガンたりうるには養殖池の造成が重要な要件であるという。

参照：渡辺弘之、西ジャワの「樹木菜園」：森林再生への応用、グリーンパワー、1987年10月号、16-19、1987。

32) スリ・ランカのハンパントータ県のIRDP（農村総合開発プロジェクト）では、女性世帯主がターゲットグループになっていた。

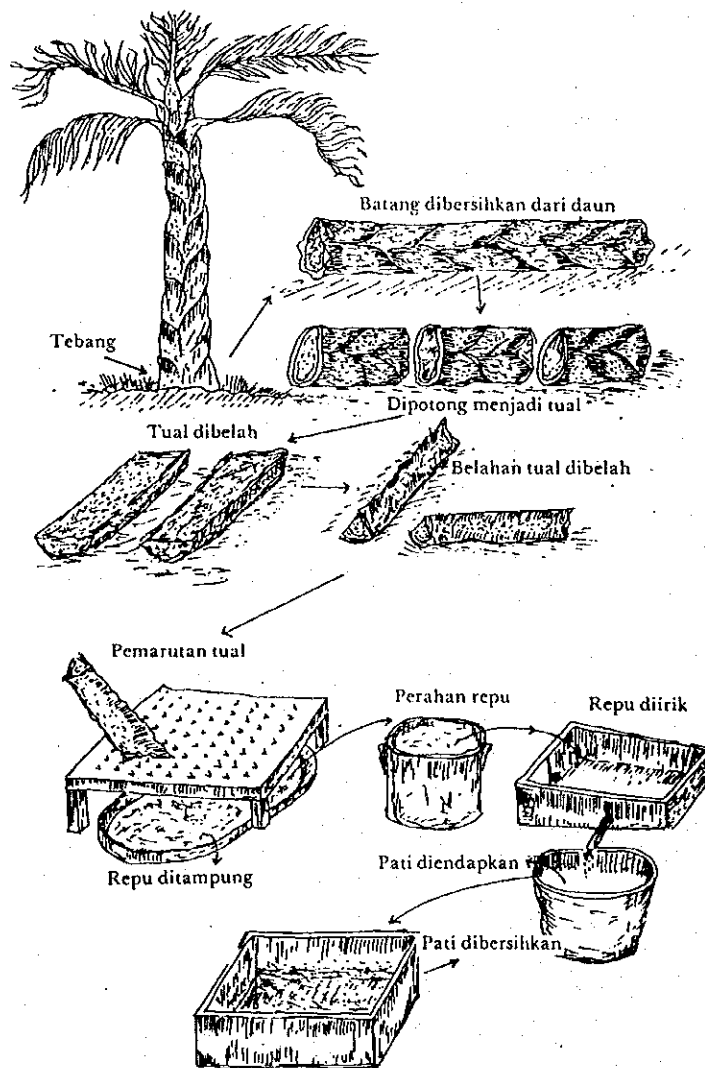
33) サゴ採取は手間がかかる。この過程を概略しよう。

サゴ採取には4人が1組になる。1組に粉碎用の機械を1台保有。サゴ林の中の水の得られる場所に設置する。小さなプールをつくり準備をする。切り倒すサゴの木まで行き、切り倒す。チェーン・ソウで3分、斧だと1人で約7～8分かかる。倒れた木から葉を山刀で切り落とす。1本につき30分かかる。幹だけになったサゴを約1mの長さ丸太に切り分ける。1本で15本ぐらいの丸太になる。斧で2人がかりで約1時間かかる。

丸太を洗い場まで運ぶ。50mの距離が機械設置場所までであると4人で1本のサゴを運びだすのに半日仕事になる。そこで丸太の皮を剥ぎ、髓だけにする。これをタテに割り、数本の角材

にする。ここまでの作業に1本1人で20分かかる。角材を粉砕機で粉砕してオガクズ状にして1本のサゴの木全体を粉砕するのに1時間半位かかる。プールの水を使いオガクズ状のサゴをもみ洗う。この過程が最も時間がかかり、1本のサゴの木を全部するのに朝8時から夕方4時までかかる。3ヵ所に分けて作業をするので実働6時間で18時間かかることになる。これを9～10日分ぐらい洗浄すると沈殿槽に澱粉ができてくる。これをニッパで編んだ俵に詰める。沈殿槽にいっぱい濡れサゴを1俵3Kgで300俵になる。この作業が3人で1日仕事になる。1ヵ所に洗い場が設置されてサゴ澱粉を採取する作業は4～5ヵ月になる。(以上、高谷好一、1983、「南スラウェシのサゴ生産」、『東南アジア研究』21巻2号、PP.235-260、参照。)

図は Ir. BUDHI HARSANTO, 1987, Budidaya Dan Pegolahan SAGU, PENERBIT KUNISIUS, P. 71 によるもので粉砕機を用いないでサゴ澱粉を採取するやり方が示してある。高谷によればこのオロシガネ(parut)でやる方法は1本の木を粉砕するのに3、4日かかるという。



Gambar 10.3. Skema Proses Pengolahan Sagu di Riau

図4-6-1 サゴヤシから澱粉をつくる作業過程 (オロシガネでする場合)



- 34) 西村美彦, 1993前掲書
- 35) 南東スラウェシでの専門家との協議での話題から。
- 36) Chambers, R., 1987, Short Methods in Social Information Gathering for Rural Development Project, Khon Kaen University, 1987, "International Conference on RAPID RURAL APPRAISAL", pp.34-38
- 37) Beebe, J., 1987, Rapid appraisal: The Evolution of the Concept and Definition of Issues, Khon Kaen University, 1987, "International Conference on RAPID RURAL APPRAISAL", pp.5038) CIDA, 1991, 前掲書, P.10
- 38) CIDA, 1991, 前掲書, P.10



## APPENDIX

### Appendix I フィールドでの調査行程

1. ラノメト村（ジャワ人インフォーマント聞き取りグループ）調査行程
2. パラッカ村調査行程

### Appendix II 関係機関取り組み関連資料

1. 農業省P4Kプログラム農村現状調査項目概要
2. USAID Penelitian Pengembangan (Joint Research and Development)
3. AIDAB” Introduction to Government Administration,  
Planning and Budgeting in Indonesia” 概要

### Appendix III RRA手法の広がりや深まりの可能性の例



## Appendix 1 フィールドでの調査行程

### 1. ラノメト村（ジャワ人インフォーマント聞き取りグループ）調査行程

	調査対象者	調査方法	調査内容	所要時間	備考
第1日	南東スラウェシ州農業・農村プロジェクトチーム日本人専門家グループ	プロジェクト事務所で聞き取り調査（グループインタビュー）	プロジェクト概要説明及び対象地域の現状 ・農業基盤整備の現状 ・地域内の民族グループ別の営農形態及び活動計画 ・普及活動の現状及び活動計画 ・地域における男女の生活状況 ・市場の状況等	3時間	
第2日	・ラノメト村担当農業普及員 ・（男性）農民グループ及び女性農民グループメンバー	グループインタビュー（男女混成グループ）	・生活のための活動状況（再生産、生産、地域活動など） ・男女別アクセス及びコントロール状況 ・男女のグループダイナミックス等	2～3時間	
	ジャワ人インフォーマント世帯A（カディムン、スラミ夫妻）	世帯訪問調査 ・夫婦へのインタビュー、 ・屋敷地、圃地の踏査略図作成	・土地利用状況の観察 ・資源利用状況の観察	1～2時間	女性農民グループの中でリーダー格の女性の家を訪問。
第3日	ラノメト村朝市	・内部の見学 ・売り手、買手へのインタビュー	・販売内容、規模 ・販売物の入手方法 ・購買内容 ・買手、売り手の居住地、移動方法等	1時間	
	キヤエア村訪問、女性農民グループメンバーへの聞き取り	グループインタビュー	ラノメト村とほぼ同じ。	3時間	訪問したラノメト村、キヤエア村のうち宿泊地であるクンダリ市に近いラノメト村を今後の調査地として選定する。
第4日	ラノメト村村長及び役場関係者	ヒアリング	村の概況、歴史、社会、文化等	1.5時間	ここでこれからの調査のインフォーマントを推薦してもらう。
	ジャワ人インフォーマント世帯B（アブドゥル、ダルシア夫妻）	世帯訪問調査 ・インタビュー ・屋敷内、圃地踏査、略図作成	・ラノメト村への移住の経緯・夫の失業（伝統的治療師）に関するインタビュー ・土地利用、資源利用状況	2時間	村長に推薦されたインフォーマント
第5日	ジャワ人インフォーマント世帯B	世帯訪問調査 ・資源調査 ・生活時間帯調査 ・屋敷地、圃地、水田踏査	・資源利用状況 ・男女別生活時間 ・男女別活動状況	1時間	
	ジャワ人インフォーマント世帯A	世帯訪問調査 ・インタビュー ・屋敷地、圃地等踏査 ・生活時間帯調査 ・農業暦作成	・家族構成 ・男女別生活活動 ・夫妻の結婚に至る経緯 ・男女別生活時間 ・土地利用、資源利用 ・農業暦	2時間	ジャワ人インフォーマント世帯Bが農業を生業としない世帯であったので、第3日目のグループ調査の時に訪問したインフォーマント世帯Aに調査対象を変更し、調査を続けた。また遠隔のため、カシュー園と森林は踏査できなかった。

2. バラッカ村調査行程

	調査対象者	調査方法	調査内容	所要時間	備考	
第1日	バラッカ村、アナバウア村踏査	・乗用車で村内を見学 ・村の井堰、簡易水道等の施設を見学	自然環境、土地利用、住居の状況等を観察	1時間	この踏査により、宿泊地であるバル市に近いバラッカ村を選定。	
	バラッカ村村長	インタビュー	村の概要（構成世帯、産業、社会組織、文化等）	1時間		
	インフォーマント選定のために、候補の2つの世帯を訪問	世帯訪問調査 ・インタビュー ・屋敷地の状態の観察	・家族構成 ・所有土地及び職業 ・屋敷地の利用状況	1時間	・インフォーマント候補は協力隊プロジェクト関係の村人に選定してもらう。 ・二つの候補のうち、夫がインドネシア語を理解する世帯を選定（他方は夫婦とも、こちらも妻はインドネシア語を理解しない）。	
第2日	バラッカ村朝市	内部の見学 売り手、買手へのインタビュー	・販売内容、規模 ・販売物の入手方法 ・購買内容 ・買手、売り手の居住地、移動方法等	1時間		
	インフォーマント夫妻（アブドゥル、ヤンナ夫妻）	世帯訪問調査 ・インタビュー	・生活のための活動調査（再生産、生産、地域活動など）	1時間		
	夫と妻と分かれて調査を続ける	夫 ・インタビュー ・圃地、水田踏査 ・資源マップ作成 ・植物資源リスト  妻 ・インタビュー ・屋敷地踏査（屋敷地、住居略図作成） ・植物資源リスト（屋敷地）	・資源利用状況 ・植物資源認識  ・屋敷地利用状況 ・屋敷地植物資源認識	3時間	夫への聞き取りは男性調査員とインドネシア語→英語通訳者が、妻への聞き取りは女性調査員とプギス語→インドネシア語→日本語通訳（二重通訳）がについて実施された（第3日目も同様）。	
第3日	夫と妻と分かれて調査を続ける	夫	・水田踏査 ・農業暦作成 ・住居の移築の経緯聞き取り	・植物資源認識 ・一年を通しての農作業、労働交換 ・生産物の販売、交換 ・住居の移転の経緯	3時間	・遠隔のために、2km先の圃地と10km先の森林へは踏査できず。
		妻	・圃地、水田、河原踏査 ・資源マップ ・植物資源リスト（圃地、水田） ・社会、ジェンダー調査聞き取り	・資源利用状況 ・植物資源認識 ・生活のための活動調査（再生産活動、生産活動、地域活動）		

## Appendix II 関係機関取り組み関連資料

### 1. 農業省 P 4 K プログラム農村現状調査項目概要

#### (1) 対象地域の選定

貧困世帯が多く、潜在資源が多い地域を優先的に選択している。しかしその選択の材料となるものについては不明。

#### (2) 対象農民のスクリーニング

ターゲットとする農民を同定するための調査表を用いての調査。

(調査項目)

- ・職業
- ・土地所有
- ・農具所有
- ・家畜所有
- ・所蔵貴重品
- ・他の政府関係のローンの経験（返済済みであるか？）
- ・所得の査定（月あたり及び年あたり）

作目、作業ごとに計算したのちに最終的に年間の米相当で換算する。

ボーダーラインとなるのは年間家族一人あたり米320キロ。

#### ・経費の査定

食物、保健医療、光熱費、教育費、衣料費、交際費、住居等の改修費、税、交通費、娯楽費、その他。

#### (3) ターゲット層を同定した後にターゲット農民の現状把握、意識啓蒙のための世帯調査

- ・家族構成とそれぞれの教育レベル
- ・農業の新技术導入の経験
- ・村の社会活動への参加の状況
- ・村の開発事業への参加の状況
- ・農業普及活動への参加の状況
- ・村内の社会組織への関与
- ・政府スタッフとの接触の度合い
- ・住居の現状
- ・貯金と借金
- ・食事内容（野菜、タンパク質、果物、豆の摂取の状況）

- ・健康状態
  - ・飲料水
  - ・水浴
  - ・ゴミ処理
  - ・廃水、下水
  - ・家族が病気になった場合どうするか？
- ・出産と死亡
- ・子供の教育と将来への期待
- ・家計費及び所得の見積額

## 2. USAID Penelitian Pengembangan (Joint Research and Development)

目的：

- 1) 他の地域やプロジェクトで応用し得る環境保持的な農法のモデルを開発する。
- 2) 代替可能な技術の範囲と適用し得る生態的、社会経済的条件を明らかにする。
- 3) 地方政府、研究者、普及員と農民の間の密接な連携をつくるシステムづくり。

方法：

- 1) 活動地域の選定
  - ・それぞれの地域は一つのマイクロ氾濫原を代表すること (10~50ha)。
  - ・土地は地域の農民によって所有され、管理されていること。
  - ・農民がプロジェクトと一緒に活動することに関心を持っていること。
  - ・地域は潜在的な資源をもっていること。
  - ・幹線道路に近いこと。
- 2) プロセス
  - ① 最初RRAによって地域の現状把握と問題点、可能性が調査される。
  - ② 農民グループが編成される。
  - ③ 地域の農業生態的、社会経済的条件によって、代替可能な戦略を模索する。
    - －農民は計画当初からプロジェクトに関わる。
    - －プロジェクトには地方政府、普及員、研究者が複数の分野から参加する。
      - \*複数の機関が参加するため、計画段階からの意思疎通が重要となる。
    - －プロジェクトによって開発された技術の適合性の評価の指標とするためにベースライン調査が実施される。これは、当初の農民の状況を把握し、変化をモニターするために行われる。調査項目としては、
      - ・農業生産性



- ・収入（農業及び農外収入）
- ・土壌流失度
- ・労働力配分と季節的な労働力の確保の現状
- ・農民間での、及び農民と関連組織間での関係の動的な変化。

### 3) 代替技術の試験的導入

- ① 初年度・・・農民は標準的な代替的農法のための農業インプットを提供され、その技術を試行してみる。
- ② 2年度・・・農民は自分の資源を活用し、必要な場合に支援機関からインプットの支援を受ける。

調査開発チームはモニタリングを続け、必要に応じてインプットを提供する。

この手法は農民、普及員、民間投資者、及び研究者間の技術移転に有効な場を提供することができる関係者は考えている。また、手法のプロセス解説のために、プロジェクトによって実施のための詳細なガイドラインが作成されている。

## 3. A I D A B " Introduction to Government Administration, Planning and Budgeting in Indonesia" 概要

援助機関がこのような援助計画を立てるに当たって、相手国政府の行政システムをまず把握する事が重要であるとして、A I D A Bでは上記名称のマニュアルを作成している。このマニュアルはインドネシア政府行政の仕組みについてあまりよく理解していないコンサルタントなどが仕事をすにあたって参考となるようにつくられたものである。この資料は前述のC I D Aのプロジェクト運営においても参照されており、このように基本的な情報整備ことも重要である。

内容としては、以下のように目次が並んでいる。

### 第1章 政府と政策制度：歴史的そして思想的背景

- 1-1. 独立から新政府まで。1-2. 開発戦略。1-3. パンチャシラ

### 第2章 政府の構造

- 2-1. 中央政府の構造。2-2. 地方政府の構造。

### 第3章 国家開発計画と予算：政策制度と調整

- 3-1. Repelita。3-2. 予算の構造。3-3. 計画と予算策定の運営。
- 3-4. 計画と予算サイクル

### 第4章 地方レベルの計画と予算

- 4-1. Pola dasarと Repelita Daerah。4-2. 地方予算の構造。
- 4-3. Bappeda。4-4. 計画と予算サイクル。

## 第5章 財源

- 5-1. 中央政府の税収。5-2. 地方政府の財源。5-3. 資金供与。
- 5-4. Presidential Instruction Grants。5-5. On Top基金。
- 5-6. セクター別支出。5-7. ローン。5-8. 中央と地方予算。

## 第6章 インドネシアとオーストラリアのプロジェクト策定プロセスをリンクする

- 6-1. オーストラリア政府の手続き。6-2. インドネシア政府の手続き。
- 6-3. インドネシアでのプロジェクト実施における基本的な関連法。
- 6-4. プロジェクト実施文書

## 第7章 インドネシアでのプロジェクト実施

- 7-1. 主要要素。7-2. 文書化。7-3. 機構。7-4. 責任。
- 7-5. 資金提供。7-6. 一般。

Appendix III RRA手法の広がりや深まりの可能性の例

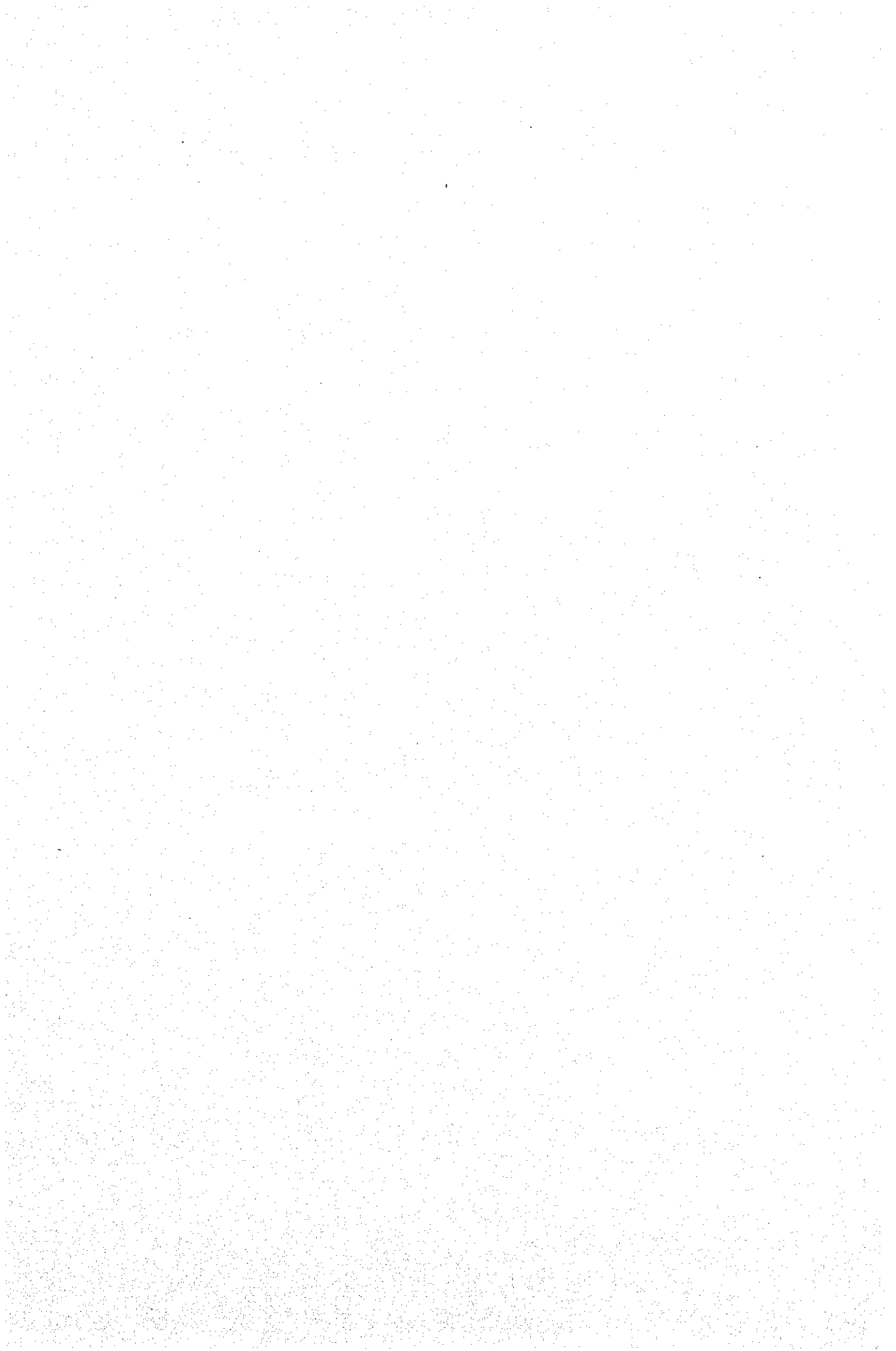
代表的手法：半構造的インタビュー (家族の成員やキーインタビューーマンへのインタビュー)		半構造的インタビュと結びつける手法						
組織/運営のための手法	インタビューチーム 技術	個人/一般的手法	時間/空間/論理的 図式化	対面聞き取りによる 情報入手	既存の情報収集	調査地での観察	指標	物理的な測定
- RRA文獻トレーニング	- チーム内のメンバー固定 vs 交換 (ソングデオ方式) - 調査にあたっての基本台意事項のガイドラインづくり	- 質問表を用いないインタビュー - 質問における5W1H (誰が、何を、どこで、いつ、なぜ、どのように) - 更に深い内容への関心 - 現地の名称 - 現地の人々による分類法 - 口承伝説	- 作物暦 - 年表 - 土地の横断面図作成による地勢と土地利用の把握。 - 同上 (その変化変動) - 村落地図 - 耕作地地図 - 意思決定ツリー - 労働力暦 - ある仕事における作業の流れの聞き取り	- フォーカスグループ - 公開討論 - 簡単な質問票	- 研究/報告書 - 調査地のデータ - 統計 - 地図 - 航空写真 - 専門家の意見	- 道路/通り - 調査地横断 - 村内の踏査 - 耕作地観察 - 高みからの鳥瞰 - 住居/集落 - 店/集会所	- 一般性 - 特定対象 [数量調査] - 住居 - 耕地 - 乗り物	- 巻尺測定 - スケール - 量の測定 - 自転車の走行記録計を利用した距離測定 - 歩数計 - トランジット (三角測量計) - 水準器 - 距離計 (写真用) - 高度計
- インタビューガイド	- 特定の調査における基本台意事項の取り決め							
- 調査地選定								
- 入手可能な情報及びキーインタビューーマンの活用								
- チーム内の情報交換と意識のシェア								
[記録手段] - 帳面								
- カメラ								
- ビデオ								
- スケッチブック - グラフ用紙等								
- 標本等の持ち帰り								

(注) \* ソンデオ  
 I T C A (Institul de Ciencia y Tecnologia Agrícolas, Guatemala) がグアテマラで開発した手法。7日間の調査で対象地域の農民が慣行している作付体系の中で、同質な作付体系を明らかにするために、5人の農学者と5人の社会学者を各分野から1人ずつ、2人組を作って農民にインタビューをおこなったものである。この組は現地調査の4日間毎日教えられ、日々の調査の後にチームで討論をおこなった。これにより、学際的な報告が進められ、チーム間での知識、経験の交換が図られる。また、報告書は、それぞれの調査者のレポートをあわせるかたちで週末にかけて作成された。  
 (MacCracken, J. A., Pretty, J. N. and Conway, G. R., An Introduction to Rapid Rural Appraisal for Agricultural Development. International Institute for Environment and Development, 1988, p52-53.)  
 \*\* Grandstaffら (1988) の第4図より作成。(Grandstaff, T. B. and Grandstaff, S. W. A Conceptual Basis for Methodological Development in Rapid Rural Appraisal: in Proceedings of the 1985 International Conference on Rapid Rural Appraisal. Khon Kaen University, 1987, p69-88.)









JICA

